ぶ　る　う　ら　ん　ど

横　尾　忠　則

文藝春秋

CamScannerでスキャン

目次

ぶるうらんど 5
アリスの穴 33
CHANELの女 75
聖フランチェスコ 119

CamScannerでスキャン

ぶるうらんど

CamScannerでスキャン

チャイの香りがしてきた。

妻が書斎に入ってきたことを直観した。妻と二人でインドに旅行した時、アーメダバッドの道端でターバンを巻いたシーク教の髭の男が、実演しながらコップに注いでくれたチャイの味が忘れられず、帰国してから見よう見まねで覚えた妻の手作りのチャイの香りが背後から忍びよるように近づいてくるのを、私は心の中で手を叩きながら期待するのだった。以来、チャイはわが家の自慢の味であると同時に妻が私に贈る憩いのひと時でもある。

薬缶に湯と同時に牛乳、砂糖、それにカルダモンの実と生姜を入れて沸騰するまで煮る。それを一度空気に触れさせるために空中で放物線を描きながら別の容器に何度も移し替えるさまは水芸の奇術さながらだ。だが、指紋がこびりついて白く曇ったガラスコ

ップに注ぎ込んだチャイを手渡されるのにはぞっとさせられたものだ。なんと不潔な！でもこれがインドなのである。――まあこんなことはどうでもいいとしよう。

「あなた、一休みなさってお茶でもいかがですか」
「ああ、この香りを嗅ぐと生きている実感がするなあ」
「本当ですわねえ、もう一度インドに行ってみたいわ、私」
「あれが最後だったなあ。でもこうしてチャイを飲む度にあの炎天下のインドを思い出すよ」
「チャイのコップの縁に蝿が何匹も輪を描いて止まるのを手で払いながら飲みましたわねえ」
「今となれば全て夢だった」
「そうでしたねえ」
「ところで今何時だい」
「あら、いつも時間をお聞きになりますわねえ。わが家の時計は全部針が動かないままですわ」
「ああ、そうだったなあ。すっかり忘れていた。そういえば俺の腕時計も止まったまま

だったんだ」
「私達の生活にはもはや時間は何の役目も果たしませんわ」
「そうだったのだ。必要ないんだ、時間は。つい以前の慣習から抜けられず、思わず時間が気になるんだよな」
「あまり時間のことを気になさると、生きにくいですわよ」
「まったくその通りだ」
「だったら時の流れはお忘れになるべきですわ」
「それにしてもお前はこんな状況でよく我慢できるもんだねえ。感心するよ」
「誰も好き好んでここにいるわけじゃありませんわ」
「俺と一緒にいることがか」
「まあ、あなたってどうしてそんなピントはずれなことをおっしゃるのかしら、おかしいわ」
「どうせ俺の自業自得ってことがいいたいんだろう」
「何をそんなにご自分を責めていらっしゃるのですか」
「とにかく俺はこんなところにいる意味がよくわからんのだよ」
「それは私とて同じですわ。でもあなたは原稿を書くというれっきとしたお仕事がある

じゃありませんか」
「大した意味と目的がね」
「私はそのどちらも持ち合わせていませんわ」
「お前はそんなものなくたっていいさ。でも俺は作家だから、意味がなくても意味を考えなきゃならん。またそれが目的でもある。意味も目的もなく過ごせるお前が俺は羨ましいよ。そもそも俺はお前とこんなくだらない議論をするためにわざわざここで一緒に住んでいるわけじゃないからね」
「その通りですわ」
「そんなに退屈しているなら気分転換に外出して友達と時間つぶしでもしてきたらどうだね」
「あらおかしい、あなたって。だって時間のないところでどうして時間をつぶすのかしら」
「いちいち言葉尻をとってからむなよ。ちょっと黙っていてくれないかね、書き物がちっとも進まないじゃないか」
「時間が存在しないのなら別に急いで書かれることもないんじゃないでしょうか」
「俺がこうして机に向かってただただ原稿用紙の升目に一字ずつ文字を埋める作業をし

ているのは俺のイライラな性格を落ち着かせるためでもあるんだよ」
「あなたのイライラは昨日今日に始まったわけじゃないですわ。お若い頃からちっとも
お変わりになっていらっしゃらないじゃありませんか」
「だから明けても暮れても同じことをやっているんだよ。性格ってやつは変わらないも
んだ。小説家ってやつは結局、常に自問自答しているわけだからイライラもするさ」
「ご自分との対話がお仕事なのね」
「おいおい、イライラが仕事だなんて、何だか皮肉に聞こえるじゃないか」
「皮肉など申し上げていませんわ。ここでは誰もが自分と向き合わざるを得ないように
なっているのだと思いますわ」
「するとここの人間は作家と同じような生き方をしているってわけか」
「いちいち原稿用紙には向かいませんけれどもね」
「小説は俺にとっては精神安定剤みたいなものだよ。書いていないと不安になるんだよ
なあ」
「因果なご商売!」
「まったくだ」
「小説が駆け込み寺ってわけですね」

「うーん、駆け込み寺か。小説を読んで救われる者がいるかと思うと、小説を書くことで救われない小説家もいるってわけか」
「私、文才などなくってよかったわ」
「そうだな、結局小説にしろ他の芸術にしろ、創造というやつは現実からの逃避なんだよ」
「逃避できるものがあるだけ、あなた幸せじゃないですか」
「俺みたいなイライラ屋は創作に打ち込んでいなかったら、とっくの昔に首を括っているよ」
「私達の生活が維持できているのも、もとはといえばあなたのイライラな性格のお陰ね」
「そうなんだよ。だからイライラが飯の種になっているってわけさ」
「ハイハイ。感謝申し上げておりますわ。……ねえ、あなた、ちょっと窓を開けて新鮮な空気に入れ換えましょうよ」
「息苦しい会話になってきたからなあ」
「あーら、いい風。それにいい匂いですわねえ。私、生き返った気分ですわ」
「金木犀の匂いだなあ」

「樹の根元をごらんになって。空のお星さまが全部地面に落っこちて集まったみたいで、まぶしいくらいの黄金色に輝いていますわ。こういう眺めって癒されますわ、私」

「退屈も考えようによっては癒しなんだよ」

「じゃあ私、毎日が平和ですわ」

「時間がないということはそういうことなんだ」

「でも私、やっぱり時間のあるあちらの方が退屈しないで愉しかったわ。あなたは小説の世界に没頭なさっていらっしゃるので、あちらもこちらも同じなんでしょうけど」

「虚構と現実の両方を生きているという意味ではな」

「創造っていうのは時間を超えた世界なんでしょ。うらやましいと思いますわ。だって最初から時間のない世界に住んでいらっしゃるのだから、今さら時間がどうのって考えられる必要などないんじゃありませんか。……ところであなた、以前に比べるとずっとお若くなられたように思うのですが。髪の毛だって白髪がなくなり、皺もなくなって

「……」

「俺もたった今、お前に同じことを言おうと思っていたばかりだったんだよ」

「じゃあお互いに若返ったのかしら。どうしてこんな不思議なことが起こるんでしょうかねえ」

「どうもここは時間が後ろ向きに進んでいるような気がするなあ。まあ、あちらのようなわずらわしさはこちらでは一切ないからだろう。それにしても気のせいか、若い時のように活力さえ張っているような気がするんだがねえ」

「そういえば、なんだか私も。それにうるさい長男も嫁にいった長女も喧嘩したからといってすぐに里帰りすることもなくなったし。それだけでも私達はうんと解放されましたわねえ」

「子供だけじゃないよ、俺だって締め切りにうるさい編集者の切羽つまった電話の声や悲愴な顔を見なくなっただけでも、延命できたような気がするよ」

「向こうだってあなたがいなくなって原稿の催促をする必要もなくなったから、きっと寿命が延びてらっしゃるんじゃないかしら」

「そりゃそうだろう。お互いによかったということになるな」

「なのにあなたはどうして依頼もなく、掲載のあてもない原稿を毎日書いていらっしゃるのかしら」

「まあ一種の生理現象みたいなものだ。物書きはこの業から解放されない因果な商売なんだから、すべて宿命だよ。前世から約束された運命ってやつだよ。約束を果たしているだけだ」

「せっかく編集者から解放されたのですから、少しはお仕事を止めてボヤーッとするなり、旅行でもなさるなりしたら如何なんでしょうかねえ」
「今、俺が書いているのは別に編集者のためでも、どこかに発表するためでもないんだよ。お前みたいに退屈をむさぼって自分を証明できるんだったら俺だってそうしたいよ」
「あなたの手持ちぶさたな退屈そうな姿、一度でいいから見てみたいわ」
「俺はお前みたいに単細胞にできていないんだよ。複雑怪奇で謎だらけの人間なんだ」
「あら単細胞で悪かったわねえ。そうおっしゃるあなたもいつか、人間は単細胞の方が悟るのも早いんだというような意味のことを雑誌の取材でお話しになっていらっしゃったのを私ちゃんと覚えていますわ」
「あれはだね、つまり、何ていうか……そうだ、あの、知性に対する批判として言ったんだよ。お前はすぐ鵜呑みにするんだから」
「ハイ、単細胞ですから」
「ありゃ知識人という鼻持ちならん人種に対するアイロニー、いわば当てこすりだよ」
「と、おっしゃいますと、つまり自己批判というわけですね」
「あれはだね、何というかつまりこういうことなんだよ。あっちの世界での概念で、こ

っちの世界ではむしろお前のような人間の方が通用するってことなんだよ」
「私のことを下げたかと思うと上げてくださったり、だからインテリは複雑怪奇なのよ。そんな複雑な人間と単細胞な人間がよくこうして同じ場所にいられるものですわねえ。本当に私、不思議に思いますわ」
「そりゃあ人間ってやつは複雑の中に単純が存在し、単純の中に複雑が潜んでいるんだから、その両者を切り離して考えること自体が間違っているんだよ。だから一見異なった性質の人間のように見えてもわれわれは同じ穴の狢なんだ」
「難しいことはわかりませんが、じゃあ対立って概念はないってこと？」
「そうだよ。結局われわれ夫婦は親和性の法則によってこうして同じ屋根の下に住んでいるってわけさ」
「二人とも似たりよったりっていうことね」
「類は類を以て集まるという論理さ」
「あちらではお互いに考えていることが別々だったので、まさかこちらで再び同じ所に住むなんて想像もしていなかったわ」
「俺もそのことにちょっと驚いているよ」
「じゃあ、あなたは私と一緒に住みたくなかったってわけね」

「全くお前という奴は、単純どころか実に複雑な奴だよ」
「女は魔性の動物ですからね」
「親和性というのは人間知を超えた法則の作用で、われわれは今こうしてここにいるんじゃないか」
「私だと思っている自分とは別のもうひとりの自分が今の私ってことね」
「向こうではそうじゃなかった。だけどこちらでは二人の自分はいないってことだよ。本来の自分しかいないわけだよ」
「じゃあ向こうでは二人の自分を、本音、建前っていう具合に使い分けていたってことね」
「大部分の人間がそうだろう」
「私、そんな自分ってイヤよ」
「社会の仕組み自体が建前でできているからなあ」
「ここでは通用いたしませんわ」
「俺自身にならざるを得ないんだよ」
「私達って悟ったのかしら」
「本来人間ってこうでなければいけないんだよ。それがこっちに来て、本来の自分でし

か生きていけないという悟性に目覚めただけなんだ」
「気づかされるために私達はここに来たわけですね」
「ああ、そういう言い方もできるだろうね」
「それにしてもどうしてあっちにいる時に気づかなかったのかしら」
「そりゃ肉体が物質に縛られていたからさ」
「こっちにだって肉体も物質もありますよ」
「それもこれもあちらの慣習がまだ完全に抜けていないからじゃないかな。俺とはこういう存在だという意識が強いからだろうなあ。でも向こうのように物質に対する欲望や執着はないだろう」
「財産的価値がないですからね」
「第一、金銭を必要としないじゃないか。欲しいものがあれば、想念によって呼び寄せられるわけだから、これが本当の文明だよ」
「マジックみたいですわね」
「これこそ超能力だなあ」
「するとこのわが家だって想念によって出来ているってわけかしら」
「お前と俺の二人の想念が具現化した創造物ということになるなあ」

「それにしても以前と全く同じ家じゃねえ」

「新築の立派なモダンな豪邸にでも住みたいというのかね」

「玄関の外の金木犀もそのままだし、庭の池の鯉だって数まで同じ。藤棚からぶら下がっている豆までそのままだわ。家の中の家具も当時のまま。ルドンの版画も、暖炉の上の涅槃像の置物まで何ひとつそっくりそのまま向こうから移ってきたんだわ」

「俺の机の引き出しの中身までがそっくりそのままなんだよ」

「これって一体何なのかしら」

「精神の投影としかいいようがないだろうなあ」

「地上とそっくりなんて、こちらに来た価値がないんじゃないでしょうか」

「まったくお前の言う通りだよ」

「私は、池にはきれいな蓮の花が沢山咲いていて、どこからともなく妙なる音曲が聴こえ、辺りには何ともいえない芳香が漂い、黄金の雲に乗った天女が天上から舞い下りてくるような光景を想像していたわ」

「そりゃお前、阿弥陀浄土の情景だよ」

「だって死んだら誰もが仏国土に招かれるって教えられていたわ」

「そこが宗教の欺瞞というやつなんだ」

「だってここは天国ではなかったのかしら」
「天国には違いないが、お前のいう天国はありゃ幻想だよ。生きている人間の願望が生んだ幻想世界だ。現にわれわれは天国に来ているというのに、どこに天女がいるというんだね。この現状をお前ならどう説明するかね」
「地獄でないことはわかるけれど本当の天国って私達の知らないどこか遠い遠い所にあるんじゃないかしら」
「探しにでも行ってきたらどうだ」
「あなたって夢のない方ね」
「俺だって今ここに来ていること自体どう考えても理解できないんだよ。第一人間は死んだら無になると思っていたのが、こうして現に生きているじゃないか。どう考えても理解できない。不思議としかいいようがない。だから俺は時に、気が狂っているんじゃないかと思うことがあるんだよ。だって死んだはずの猫のマックスまでここにいてちゃんと生きているじゃないか。猫はいいよな、自分が死んだことも、今こうしてここにわれわれと一緒に住んでいることも何の疑問も持たないで、一日中ソファーの上で死んだように眠ってばっかりいるんだから」
「あなたって考え過ぎだわ。死んだのだから、それはそれでいいじゃありませんか」

「自分の死をもっと素直に認めろといいたいんだろう」

「あなたはガンで亡くなったのよ」

「俺は唯物論者だから、人間の肉体の消滅と同時に脳の機能も停止する、すると俺の記憶も思想も意識も何もかも、脳味噌が灰になったんだから当然無に帰すということになるじゃないか。そんな考えで生きてきたから今の状況こそ夢か幻覚を見ているとしか認識できないんだよ」

「ところがこうしてあなたがあなたとして存在しているわけですから、その分あなたとしては知恵が浅かったんじゃないかしら。私のような単細胞人間はあなたのように悩んだり迷ったりしない分、眠っている間にすんなりとここまで運ばれて来たのよ。あなたは私より七年も先に亡くなられたのに私のところに来られたのはつい最近だったのよ」

「俺は、病院での記憶を最後に、いきなり墨汁の中に顔を突っ込んだような漆黒の暗闇の中に投げ出された。あの恐怖は、作家の俺でも言葉では表現できないよ。あの時ほど心から死を願ったことはなかったなあ。それからどの位の時間が経ったのかさっぱりわからなかったが、遠くに灯りが見えたのでそれをたよりに歩いた。そしてその灯が実はお前だったわけさ。本当に自分の死が認められず随分長い間苦しんだり、悩んだりして困惑したものだよ」

「そんなあなたが私と再会したあと、急に知ったかぶりをなさって親和性がどうのこうのなんて難しそうなことをおっしゃるようになっただけでも私は本当に安心しましたわ」

「死を認めた途端、暗闇が一変して、気がついたらお前のいるかつてのわれわれの家の中にいたというわけさ。本当の死からの生還ってこういうことなんだなあ」

「その間なんと七年よ」

「俺にとってあの七年間の暗黒世界はまさに無間地獄だったんだなあ」

「地獄なんて存在しないわ。あなたの頭が創造した世界がそれだっただけのことよ。でももう大丈夫よ。私がここに来たのは意外と早かったけれど、最初はあちらにいた時と全く同じ環境だから、私は再び生き返ったのかと思ったくらいだわ。だって生きていた時に住んでいた家と寸分変わらないんですもの。いつも書き物をしていらっしゃるあなたがいらっしゃらないということと、子供が遊びに来ないということを除けば、何ひとつ変わっていないんですもの」

「そう考えればわれわれは死ぬ必要が本当にあったのかねえ」

「あなたって面白いことおっしゃる。だって人間はいつか死ぬんですから死の必要があるに決まっていますわ。ホホホホッ」

「死の問題は作家にとっては哲学的命題だよ。それにしても今だったらかなり面白いものが書けるんだけどなあ。皆がアッと驚くようなものがね」
「あら、残念ですわね」
「死んだ値打ちがないよなあ、折角苦しい思いをして死んだというのに、元を取り戻さなくっちゃ」
「蓮の池もないし、天女もどこを見ても舞っていないですわねえ」
「もう少し死の実感があってもよさそうなものなのに」
「でもこの現実が死の実感だから泣いても笑っても現状を受け入れるしかありませんわねえ。それにしても一体私達はいつまでここにこうしているんでしょうね」
「だから死は永遠の謎っていうじゃないか」
「いずれにしてもこのような状態が永遠に続けば天国も地獄になりかねないですわねえ」
「お前にとっては退屈地獄だ」
「あなたにとっては？」
「俺かい。そうだなあ創作三昧(ざんまい)地獄というところかな」
「三昧は地獄っていわないんじゃないでしょうか」

「おお、そうだ。三昧は無我の境地だからなぁ。悟り地獄とでもいうか、ハッハッハッハ」
「物書きはいいですわねえ、創造世界でいくらでも遊べるんですもの」
「特にここには締め切りというものがないからな」
「活字にならなくても楽しいんでしょう」
「何々のためっていうのがないからね。何だって手段になると面白くもなんともなくなるからな」
「昔に比べればあなたも随分変わられましたわねえ」
「地獄の苦労人だからな、ハッハッハッ。結局、人間って奴は死んでみないとわからんもんだよ」
「何でも答えを求めていらした昔のあなたを思い出すとね」
「郷に入れば郷に従えってやつだよ」
「本当に驚くほど物わかりがよくなられて」
「だけどもし俺が小説を発表する気になれば編集者は喜んで飛んでくるぞ」
「面白いわ、発表されたら如何でしょうか」
「うん、人間は死んでも尚生きているという人類永遠の謎に挑戦した小説を書きたいね

え。きっと人類の光明になるぞ」
「やってちょうだい！」
「生きている間には想像もできなかった世界がこうして厳然と存在していることをもし生きていた頃にちゃんと解っておれば、それなりの違った生き方をしただろうなあ」
「本当にそう思いますわ」
「こちらに来てしまえば、地位も名誉も財産も地上の価値が何の役にも立たないことに気づいて、大抵の人間は愕然とするぞ。俺だって向こうの世界でなんであんなにあくせくと世の中に振り回されていたのかと思うと恥ずかしくなるよ」
「私だって子供達のことや、家のことで余計な心配事ばかりして……」
「もしこちらに地獄があるとすれば、死んでも尚かつあちらのことに執着して苦しむ、そんな状態のことをいうんだと思うよ」
「だけどこちらからあちらの世界に手を貸すといってもやりようがないわねえ」
「だからスパッと一線を引くしかしょうがないんだよ。今のこの家だってわれわれの現世に対する慣習がこのような環境を作っているわけだから、その慣習を頭から捨て切れば、お前の望むような蓮の池と天女の仏国土が創造できないとも限らないぞ」
「今ここで生きて行こうとする以上はやっぱり向こうの世界と一刻も早く手を切ること

え。きっと人類の光明になるぞ」
「やってちょうだい！」
「生きている間には想像もできなかった世界がこうして厳然と存在していることをもし生きていた頃にちゃんと解っておれば、それなりの違った生き方をしただろうなあ」
「本当にそう思いますわ」
「こちらに来てしまえば、地位も名誉も財産も地上の価値が何の役にも立たないことに気づいて、大抵の人間は愕然とするぞ。俺だって向こうの世界でなんであんなにあくせくと世の中に振り回されていたのかと思うと恥ずかしくなるよ」
「私だって子供達のことや、家のことで余計な心配事ばかりして……」
「もしこちらに地獄があるとすれば、死んでも尚かつあちらのことに執着して苦しむ、そんな状態のことをいうんだと思うよ」
「だけどこちらからあちらの世界に手を貸すといってもやりようがないわねえ」
「だからスパッと一線を引くしかしょうがないんだよ。今のこの家だってわれわれの現世に対する慣習がこのような環境を作っているわけだから、その慣習を頭から捨て切れば、お前の望むような蓮の池と天女の仏国土が創造できないとも限らないぞ」
「今ここで生きて行こうとする以上はやっぱり向こうの世界と一刻も早く手を切ること

しかないんでしょうねえ」
「そうすればこちらの世界の今いる環境も変化するんじゃないかなあ」
「私、それほど向こうの世界に対して執着はないような気がいたします。こちらに来た当初はあちらのことと、あなたの消息が心配だったのですが、でも今はこうしてお互いに若返って一緒にいるのですから何も思い残すことはないですわ」
「俺の場合はまだこちらに来て間がないので新参者という感じなんだ」
「その内すぐ馴染みますわ」
「俺にはまだ小説を書きたいという欲が残っているからなあ。生きている時に吐き出し切れなかったものをこちらに引きずって来てしまったから、まず俺の中に溜まっているものを吐き出さなければならない。そうやって不透明な汚物みたいな意識や感情や感受性を排斥してしまうまで書き続けるしかないんだよ」
「じゃあこちらで書いた小説を向こうで発表するなんて考えは……」
「実に醜悪な考えだったよ。取り消すよ」
「作家が如何に大変な人生を送らなければならないかが初めてわかりましたわ」
「向こうではわかっていなかったのかい」
「あなたの才能や知識が全て解決すると思っていましたわ」

「甘い奴だ」
「何もかも約束された宿命なのね」
「そうさ、これが作家の殉教ってやつさ」
「女ってやっぱり単細胞だわ。生理と感覚で生きている動物なのね」
「それが男を脅かすんだよなあ」
「だけど芸術家の妻ってミューズ神じゃやなかったかしら」
「ミューズと悪妻はコインの裏表だよ」
「天才の陰に女ありっていうわよ」
「俺は天才じゃないよ」
「私は愚妻だわ」
「だけど作家ってやつは欲も深いんだよ。名誉欲だったり金銭欲だったり、ありとあらゆる欲のカタマリだよ」
「それがこちらに来れば皆んなバレちゃうわけでしょう」
「向こうとこちらでは全てが逆転しているんだなあ」
「昼も夜も？　人間も逆立ちして歩いていると面白いわねえ」
「暢気(のんき)でいいよなあ、お前は。でも俺の身になってみろよ。針の蓆(むしろ)だぜ」

「私の性分からいえばこちらの方がずっと生きやすいわ」
「世俗にどっぷり浸かった流行作家と言われていた俺は、本性を隠蔽していた分、こちらでは厳しいよ。仮面をはがされてしまったわけだからなあ」
「こちらはお見通しの世界なんですね」
「そうなんだ。だから己自身に正直にならざるを得ないんだよ」
「あなたって可哀想。生半可売れっ子流行作家で人を諭すような本ばかり書いてそのくせご本人は素の自分が出せなかったわけでしょ。本当に可哀想！」
「だから七年間、漆黒の闇の中を魑魅魍魎（ちみもうりょう）みたいに徘徊していたんだよ。でもお前がいなかったら俺は今でも暗闇の中に閉じ込められたままだったかもしれんな。俺自身が作った世界の中でね」
「私は生きている時から本音でしか生きていなかったわ」
「だからお前は寄り道をしたり、足止めを食ったりしないでお前の心に忠実な階層に俺より早くすんなり来られたんだよ。お前より俺の方が何でも知っていて、意識レベルも高いと思っていたけれど、実際はお前の霊格の方が俺より上だったんだなあ。こちらでものを言うのは知識や知性じゃなく霊性なんだよな」
「もう今はこうして一緒に同じ家に住んでいるのですから、二人とも同じレベルなんで

CamScannerでスキャン

すわ」
「いやー、全くお前のお陰だよ」
「そんなことないわよ。あなた自身がご自分を自力でこの階層に導いてこられたわけですわ」
「地上では知識さえ詰め込めば悟れるなんて勘違いしている奴がいっぱいいるよ。地上的価値に依存している奴はこっちに来てたちまち驚くだろうよ。そういう俺だってそうだったからなあ」
「そう考えるとあちらの世界って一体何なんでしょうねえ」
「だからあちらでは現世は幻だなんて言われているんだよ」
「そうね、こちらから見れば、あちらは本当に幻ね」
「蜃気楼みたいな実体のない世界だ」
「じゃあ私達も蜃気楼だったのかしら」
「だとするともっと早く死ぬべきだったかもしれないなあ」
「私、現世の時間で七年間もこうしていると徐々にここの環境が肌に合わなくなってきたような気がしてならないのです」

以前にも増して若々しくなった妻の表情に薄っすら微笑が浮かんだ。

今まで見たこともないような輝きが彼女の内側から湧き出しているように思えた。ソファーから静かに立ち上がった妻は私に再び優しい微笑を投げかけたかと思うと、そのまま霧が晴れたように空気の中に溶け込んでいった。何の予兆もない、全く突然の出来事だった。

ハッと気がつくと、そこにはもう妻の姿はなかった。それに代わって金木犀の花の香りが一段と強く部屋の中に充満していた。私は先ほどまで妻が座っていたソファーの辺りを見つめながら、なぜかもう二度と彼女はわが家に戻ってこないことを察知した。彼女はもうこの境域の住人ではないように感じたからだ。

《彼女は上ってしまった》

私の中でそう思えた。ただ不思議なことに永遠の別離という気はしなかった。

ふと我に返ると彼女の持ち物の全てが家の中から消滅してしまっていることに気づいた。彼女が愛用していた家具や衣類、暖炉の上の彼女が大事にしていたタイで買った黄金の涅槃像、壁に掛けてあったルドンの幻想的な版画など、彼女にまつわる全ての持ち物が見事に一掃されていた。残されていたのはわれわれ二人の共作であるこの家と私の

持ち物だけだった。ただでさえ広い家の中が大きな口を開いたように抜け殻になっていた。私はそんな空虚な中に佇みながら、地上の生死を分けた別離とは明らかに異なる孤独感を味わわされていた。

と同時に不思議な気力が私の身体の底から沸々と湧き上がってくるのを感じていた。創作意欲だった。もし妻との再会を願うなら私はここで想いの丈(たけ)を小説にぶつけるしかない。

テーブルの上には私が飲み干した空のチャイのカップ、ソファーの上には猫のマックスが小さな呼吸をしながら丸くなって眠り続けていた。

アリスの穴

CamScannerでスキャン

小石を投じた瞬間、水面が外へ外へと輪を描きながら伸びていく。

あれ波紋と呼んではいいんだな

その波紋が視界いっぱいに出てきたかと思うとその中心にポッカリ光の穴が現れ、今度はその光が彼女に向かってしかしかしか求心的に接近してくる様は瞑想の経験者ないしは体験するそうな明ビジョンなのだが、彼女にとっては全く初めての経験だった。彼女は半覚醒状態のままで、呆けながら出てくる光の渦を眺めるともなく眺めていた。

視界いっぱいに広がった光は彼女には眩しく映ったがその正体は内的な神秘的ビジョンでもなんでもない、ただ無数の光がめくるめくの綾りが徐々に開くように眩しく見えただけのことだった。

〈この世の光と事物に初めて接した瞬間ってきっとこんな風に見えるのじゃないかしら〉

まだ完全に覚醒していない脳神経で彼女は今自分が目にしている光景に馴染もうとしていた。

部屋の風景は眼鏡を掛ける前の立体映画の画面のようにピンボケだったが、やがてピントがパチッと重なるのを覚えた。そこには、しまりのない程ばかでかい部屋が横たわっていて、上部は教会の天井のようにドーム型になっている。床面はといえばテニスコートが一面スッポリ入ってまだ余裕があるほど広い空間で、いつか彼女が見たアメリカの戦争映画の中の野戦病院みたいにベッドが何列も駐車場の車のように並んでいた。そして彼女はそのうちのひとつのセミダブルのベッドに寝かされているのである。

〈なぜ私がここに？〉

彼女の頭はまだ半覚醒状態から完全に抜け切れていないので、自分の置かれている状況を把握するにはもうしばらく時間がかかるように思えた。このような眠りとも夢状態ともつかない朦朧とした感覚から自由になるためには思考回路が意識の中枢としっかり結びつかなければならなかった。

〈気分は？〉

彼女は、朦朧とした意識の中で自らに問うた。すこぶる清涼な気分である。そして不思議なことにここにいる不思議さが彼女の中ではまだ充分認識されていないのである。彼女の無意識がここにいるということに何の疑問も持たないで、ただ「当然」というふりをしているようだ。彼女は自分が置かれている境遇に対して疑問を抱くどころか、この状況こそが最も自分にふさわしいと感じていた。夢の中では不条理な状況に遭遇しているにもかかわらずちっとも不思議に思わないのとよく似ていて、彼女はこの状況を夢の中と同じように思っているのかもしれない。しかし夢ではなくれっきとした現実であることは事実である。

〈まあ、変な感覚の私〉ということになろうか。

〈どうもここは病院らしいわ〉

もしここが病院だとすれば、彼女はきっと病気に違いない。だけど、どこが悪くてこのばかでかい病院に入れられているのかわからない。いくら考えてもここに入った時のことが思い出せないのだ。気がついたら今のこの状態だ。といって身体に異常をきたしている気配もない。むしろ気分は爽快である。それ以上に解放された感覚を味わっている。それにしても如何なる理由でこの巨大な病室に収容されているのだろう。でもそん

CamScannerでスキャン

な雑念を除けばこの病室は実に快適だ。どこを見渡しても照明器具らしいものが見当たらないが、病室全体がクリスタルの輝きに似て、実に柔らかい光に包まれており、どこからともなく静かな雅楽を思わせる音楽が聴こえてくる。また病院特有の鼻をつく消毒液のような臭いもなく、むしろ白檀（びゃくだん）の甘ったるい香りが一面に広がっている。彼女はふといつまでもここでこうしていたいという願望を抱き始めていた。病室といっても見渡したところ重患らしい人はひとりも見当たらない。それどころか誰もが健康体のように思える。大半が老人だけれど、彼女のように三、四十代の男女もいるし、子供や若者の姿もあり、さらに外国人も何人かいる。不安な表情の人もいるが、そんな患者にはナースがついて優しく癒しの言葉をかけているようだ。中には深い眠りに入っている人もいる。病室の中には数人のナースが往き来しているが、せわしなく動き回っている者は一人もいない。

　彼女はこのような安らぎに満ちた病室を物珍しく眺めていたが、その中の背の高い、エキゾチックな顔をしたやや年配のナースが遠くから微笑を浮かべながら彼女に近づいてくるのに気づいた。彼女はおもむろに身体を半分起こしてヘッドボードに背をもたせ掛けてナースが来るのを待った。

「お目覚めになりましたわね。ご気分は如何ですか」

CamScannerでスキャン

と、そのナースが優しく気遣うように問うた。
「ええ、信じられないほど気分はいいですわ。私、随分長い間眠っていたようですね」
〈『眠れる森の美女』の王妃さまみたいに百年もの長い間、眠っていたようだわ〉
彼女は両腕を前に力いっぱい伸ばし、指を楓の葉のように広げながらナースに微笑んだ。
「そうですね、随分お休みになられていたようですわ。何かご希望でもございませんか。もしないようでしたらもう少しお休みになられてはいかがですか」
「ここは一体どこですか。私はどうしてここにいるんでしょうか」と問いたい衝動を抑えて、「ありがとうございます」と言った。
ナースは微笑を残して別の患者の方にゆっくり歩いていった。
彼女の左右のベッドには少女と外国の老人が並んでいたがお互いのベッドには二メートルほどの間隔がある。左側のベッドの少女は十歳ぐらいで、髪の毛を左右に分け黄色いリボンで結んでいるが、彼女が目覚める以前から夢中になって本を読んでいたようだ。少女のベッドのサイドテーブルには足を広げた大きい熊のプーさんのぬいぐるみが置かれていた。また右のベッドの老外国人は薄くなった白い頭髪に長い髭を伸ばし、細いふちの眼鏡を少し鼻からずらして掛けており、さっきから異常な集中力でパソコンに向か

ってキイを叩き続けている。外国の有名な作家のような風貌をした人物で、そう気軽に声を掛けられる雰囲気ではなかった。それにしても彼女が目覚めたことに二人ともさほど関心がないのか、彼女の方を見向きもしないで、自分の世界に埋没しているように思えた。

　彼女も何かしなければと思ったが、本もパソコンもない。でも別に何かをしたいという気持ちよりも、この瞑想状態に身をゆだねている方が至福感が味わえて気持ちがよかった。彼女の長い人生でこのような至福の瞬間はかつて一度もなかったように思えた。

　彼女はまるで天国の空を気球に乗ってフアフア漂っているような夢心地だったので、できるだけ長く今の状態が持続することを心から求めた。なぜ彼女がここにいるのかなんてどうでもいいような気持ちだった。できれば永久に今という瞬間をむさぼり続けていたいと願う気持ちの方が強く働いていた。まあ現実には彼女は何かの病気でこの病院に入っているらしいのだけれども、それを確かめる気持ちなどさらさらないのである。彼女には過去も未来もなく、たった今というこの瞬間だけが彼女の居場所のように思えて充足しているのだから、それ以外の何かを欲するという気持ちは皆無に等しかった。

　長い眠りから覚めたという実感と、もしかすると催眠術をかけられてそれが解けた時

CamScannerでスキャン

の現実と非現実の狭間を彷徨っている感じに近いのかもしれないが、彼女は実際には催眠術の経験はないのでその感覚は本人にはわからない。

〈ただただ気分がいいのよね〉

この長いまどろみの中で何かを想い出そうという努力をして記憶の断片をたぐりよせようという気も起こらない。愛用の薄いピンクのレース付きのネグリジェを着ている彼女は、結婚後の最初の誕生日に夫が贈ってくれた金のフレームの手鏡がサイドテーブルの上に、そして一輪挿しには彼女の大好きな薔薇の花が差してあるにもかかわらず、それらは記憶を引き寄せるきっかけとは無関係のようだった。ここにこうしているだけで充分ではないか。——とそんな彼女でいたがっているようにも思えた。

〈それにしても本当に安らかな気分だわ。このままスーッと眠るように死んでしまってあとは何もないんなら、私どんなに幸せかしら〉

左隣のベッドの小さい女の子が突然大きな声で彼女に話しかけてきた。

「おばちゃまはひとり?」

一瞬どう答えるべきかと迷いながら、彼女は、

「そうよ、ひとりよ。お嬢ちゃんは?」

「私も」
「じゃあひとり同士で仲良くしましょうね」
「うん」
「ところでお嬢ちゃんはどうしてここにいるの」
「知らない。気がついたらこの大きい病院に移っていたの」
「あら、おばちゃまもそうよ」
　と言ったものの彼女は、少女のように「移ってきた」という実感がない。最初からここにいるのだった。女の子は自分の置かれている状況に特別の疑問も持っていないようだ。そしてさきほどから読んでいた本に首ったけである。
「お嬢ちゃん、何の本を読んでいるの」
「『不思議の国のアリス』よ」
「あらそう、おばちゃまもアリスは大好きよ」
「ここに来る前から読んでいたの」
「あら、そう」
〈ここに来る前から読んでいたの……か〉
　アリスと聞いた途端、彼女の心の中に『アリス』の一場面が迫ってくるように想い出

CamScannerでスキャン

された。アリスがうさぎ穴に落ちるシーンを。アリスに代わって彼女が真っ暗なトンネルのような穴にどんどんどんどん吸い込まれるように落ちていく感覚に襲われた。下へ、下へ、下へ。いったいどこまで落ちたら終わりになるのでしょう?
〈このまま落ちていくと地球の中心までいってしまう〉
彼女は完全にアリスと同化してしまっていた。どのくらい落ちたのでしょう。彼女はふと我に返った。
〈ああ、驚いた。私、本当に穴の中に落ちていく実感に襲われたわ〉
「お嬢ちゃん、おばちゃま、今、アリスがうさぎ穴に落ちるところを思い出したわ」
彼女の語りかけがまるで聞こえなかったかのように少女は頭も上げずに本に没頭している。そして彼女も、この本の中で彼女と少女がばったり遭遇したとしてもちっとも不思議でないような気持ちでファンタジーの世界に落下していったのだった。
そうしているうちにさっきの背の高いナースが女の子のところにやってきて、
「お嬢ちゃんをよく知っているおば様が面会室で待っていらっしゃるので、私と一緒に行きましょう」
と優しく声をかけた。少女は何の抵抗もなく「うん」と応えてベッドからピョンと飛び降りた。

「おばちゃま、ちょっと行ってくるから帰ってくるまで待っていてね」

と言ってナースに手を引かれながら軽やかに病室を出ていった。

彼女は記憶のアリスの世界から眼が覚めて、やっと現実に帰還した。と同時に再び彼女はまどろみの底に沈んでいったが眠ったわけではない。むしろ覚醒したように何もかもが鮮やかに感じられた。ベッドから身体をすべり出させて、シーツの上に大の字になって思い切り息を深くして、まるで走り幅跳びの選手のように宙を舞う格好を連想しながら大きく伸びをした。

〈ああ、生きているわ〉

という実感に彼女の中から生命力が漲(みなぎ)ってくるのを感じた。

〈なぜ、私はここにいるのかしら?〉

なんて疑問はもうどうでもいいように思えてきた。疑問を持つことさえ彼女の魂は許していないようだった。ここにいるという存在意識こそが重要で、それ以外は彼女とは何の関係もないように思えた。彼女が世界の中心で世界の中心が彼女であるというこの実感こそ彼女の命の証明でもあった。

彼女の眼に映るのはこの広い病室だが、彼女は不思議と自分の置かれている現実に何

の違和感も感じていない。病室から出て病院の中を探索してみてもいいのだが、彼女の関心事は彼女の外にあるのではなく、彼女の中にあるのだから、彼女の肉体がどこに移動しようと、また彼女の五感が何かを知覚しようと、そんなことはどうでもいいことのように思えるほど、彼女は自らが彼女であることを愉しんでいるのであった。

〈私が私であることにやっと出会えたわ〉

このような歓喜に満ちた至福感はどんな古典的な名画や音楽よりも素晴らしい出会いのように思われた。彼女は思わずベッドの上で歓喜の声を上げて、踊ってみたいような衝動に駆られていた。

病室の明かりが変わらないので今は外が朝なのか、昼なのか、それとも夜なのか、彼女にはさっぱりわからなかった。ふと空腹を感じた。

するとと実にいいタイミングで別のナースがトレイに彼女の大好物のパンケーキと牛乳、それに無花果(いちじく)をのせてやってきた。

〈あら、朝食のようだわ〉

彼女は「朝食?」と聞くのが何だか恥ずかしいような気がしたので、お礼を言ってトレイを受け取っただけだった。不思議なのはあたりを見渡しても朝食をとっているのは彼女ひとりであることだ。隣の老外国人は相変わらずパソコンに向かって何か小説でも

書いているのだろうか。隣のベッドの彼女の朝食には全く無関心の様子でただ黙々と執筆を続けている。

〈それにしてもどうして私の好物がわかるのかしら?〉

彼女一人だけが朝食をとっているのも変な感じだが誰もそのことを気にしている者がいない。彼女が目覚める前に他の人たちは朝食をおえてしまったのかもしれないと思っていたら、やがて隣の老人に運ばれてきたのは、かなり豪華な食事だった。ステーキにパンとサラダがたっぷり、その上ワインまで。デザートはマンゴーとモンブラン、勿論コーヒーもついている。マンゴーとコーヒーの香りが彼女のところまで伝わってくる。それにしても朝食とは思えない豪華版だ。彼女は朝食が終わった後、お腹がいっぱいになったのか、少し眠くなってきた。彼女は硬いヘッドボードに背をもたせかけたまま、仮眠をとることにした。

彼女はベッドの中に横たわっている。ベッドの横の椅子には父と妹が腰を掛けている。窓際には枯れかかった薔薇の花が飾られている。天井の蛍光灯が時々点滅している。壁には渓流に架けられた木の橋を小さい男の子と女の子が渡っていて、その背後には天使が二人をサポートしている寓話的な聖画が飾られている。どうやらここは病院の個室ら

しいが部屋全体が薄暗く、その上重っ苦しい空気が淀んでいる。よく見ると彼女は左腕に点滴を受けている。やがて医師が入ってきて、その後から二人のナースも現れた。医師は入って来るなり彼女の脈をとった。夢はここでプツンと切れるように終わった。

眼を覚ました彼女は今しがた見た夢からまだ完全に帰還していないのか、しばらく頭の整理がつくまでボヤーッとしていた。隣の外国人は食事が終わったのか、再び仕事を始めている。病室はさっきとそれほど変わった様子もないが、患者がいなくなっているベッドがあったり、空のベッドに新たな患者が入っていたり多少の変動があったようだ。ナースは相変わらず病室の中を往ったり来たりしているが、何をしているのかよくわからない。中にはベッドの上で立てひざをしたまま頭からすっぽりシーツをかぶっている人もいて、ナースが優しく話しかけているのにいつまでも石のように動かない。

今しがた見た夢を反芻しながら彼女は夢の意味を考えようとしたが、全く頭が働かなかった。でも気がかりな夢ではあった。病室にいながら別の病室にいる夢だった。まあ夢というのは理不尽なもので夢の意味など考えてもあまり意味がない。彼女は再び自己陶酔の世界に入っていった。随分長時間ベッドの上に瞑想のポーズで座っていたように思う。それにしても隣にいた小さい女の子はかなり時間が経っているはずなのに戻ってきていなかった。ベッドの上にはさっきまで夢中になって読んでいた『不思議の国のア

リス』の本がページを開いたままうつぶせに置かれている。サイドテーブルには熊のプーさんのぬいぐるみがひとり少女の帰りを待っている。

彼女はさっきからいろんなことを想い出そうと試みるのだが、頭の中が濃霧のように真っ白になっていて、せいぜい夢のシーンと、なぜかアリスに代わって自分が穴の中に落ちていったシーンばかりが反復されるだけで、あとはまるで記憶喪失にでもかかったように何ひとつ記憶の底から這い上がってくるリアリティが捕獲できない。といって別に不安になっているわけではない。むしろ眠る前から続いている至福感は官能の悦びに目覚めつつあって、これ以上何も望むべくもなく、"Be here now"という感覚だけが持続していた。

そこへさっき隣の少女を連れて出て行ったナースが通りかかった。彼女は少女の不在が気がかりで心配だったので訊いた。すると、

「あのお嬢ちゃんは親戚のおば様に引き取られて退院しましたわ」

と、ほっとした様子で首をちょっと横にかしげて嬉しそうに微笑んだ。

「退院しちゃったのですか」

「ハイ、よかったですわ」

彼女は軽いめまいのような一抹の寂しさに一瞬襲われた。

CamScannerでスキャン

「本当ですね」

と言って、彼女はベッドの上の本とぬいぐるみに目をやりながら、少女の去っていった姿を想い浮かべてやや感傷的になった。

もう一人の隣の作家らしい老外国人は相変わらず見向きもしないで執筆三昧に励んでいる。驚いたことに、いつの間にプリントアウトしたのか、用紙が山のように積まれている。それにしても、どうしてあんなに沢山書けるのだろうと彼女はその用紙の山を見つめた。人間技では決して書けない量だ。一カ月あってもこれだけ書けるものではないだろう。しかも老人だ。何か彼には特別な力でも宿っているのだろうか。いやきっとそうに違いないと彼女は思った。彼女は彼の仕事ぶりをそっと気づかれないように眺めていたが、特別猛スピードで書いているようにも思えなかった。

ふと左隣の少女のベッドを見るとさっきまであった『不思議の国のアリス』と熊のプーさんが消えてしまっている。誰かが来て持っていった様子もない。右も左も不思議なことが起こっている。にもかかわらず彼女は自分がここにいることをそれほど不思議に思っていないことの方が不思議である。むしろしごく当然のようにも思っている。とはいうものの彼女にはこの理由は説明できない。

どのくらいこうしていたのか、ふと気がつくとベッドの側に最初に彼女が眼を覚まし

た時に声をかけてくれたナースが笑いながら立っていた。
「ご気分は如何ですか」
と最初と同じ言葉を繰り返した。
「ええ、とっても居心地がいいですわ」
「それは大変結構です。私も嬉しいですわ」
「ずーっとこのままこうして幸せと戯れていたい気分なの」
「あら、本当によかったですわ。でもそういうわけにもいきませんわ。ご親族の方々があなたに面会をしに来ておられますから」
「エッ……、私に？」
「さあ行きましょう」
「……誰かしら？」
ナースはさっきにも増して嬉しそうな笑顔で、
「本当によかったですわ。さあ私のあとについてきて下さい」
広い病室を横切って左右に庭のある長い廊下に出た。ここで聴こえる音楽は病室に流れていた雅楽に似た曲とは異なっていて、どちらかというとクラシック音楽に近いけれど、あまり聴いたことがない種類の音楽だった。どこを見ても病院の暗いイメージはな

い。まるで高級リゾートホテルのようだ。すれ違う患者ひとりひとりの表情も気のせいか実に明るい。廊下の突き当たりの部屋のドアをナースが開けると、中にはざっと二十人位の人が講演の講師を待つような格好で椅子に腰をかけて並んでいた。

〈この中に親族の方がいらっしゃるのかしら？〉

「さあ、皆様、朝美さまをお連れいたしました。どうぞごゆっくりご歓談下さい」

と言ってナースは一礼すると、部屋のドアを閉めて出て行った。

彼女は面会者の多さに度肝を抜かれて、何が起こっているのかさっぱりわからないままにその場にボヤーッと突っ立っていると、一番前の席に座っていた婦人が立ち上がって彼女の前に近づいてきた。その婦人を見るなり彼女はあまりの驚きに一瞬呼吸が停止しそうになった。

〈お母さまじゃない！〉

「お母さま！」

彼女は思わず声を発した。彼女の眼球が液体と化して膨張したかと思うと両眼からみるみる涙が噴き出すように溢れ出した。

「朝美ちゃん！」

母も彼女の名を呼んだ。母に対する切ないほどの感情が涙となって彼女の頬をとめどなく伝って流れるのだった。彼女は小さい子供のように母にしがみついたまま磁石のように離れようとしなかった。この環境の中で母に会えたことで至福感は最高潮に達した。

「しばらくだったわねえ、朝美ちゃん。元気そうじゃない」

彼女に比べて母の抑制された感情はきわめて冷静な自然体を保っていた。

〈私、夢を見ているのかしら。もしそうだったら眼が覚めないでほしいと祈りたい気持ちだわ〉

それにしてもこの高揚した感情の源泉は何を根拠にして起こるのだろうと彼女は自問自答するのだが相変わらず意識は空白の中を漂ったままだった。この状態はドラッグ体験者ならもう少し上手に説明できたかもしれないが、残念ながら彼女はタブーに挑戦するような性格の人間ではなかったので、考えもしないことに遭遇すると意識のパニックを起こし、思考が停止状態になり、現実をあたかも夢物語のようにロマンティックにとらえてしまうのである。

〈きっと夢だわ。夢に違いないわ〉

彼女は自分の置かれた状況をこのように夢に転化して彼女の「現実」に納得しようとするのだった。まさかこの病院に母が訪ねてくるなんて夢にも考えていなかったが、ど

うして母をこんなに懐かしく感じるのかは彼女自身不思議でならなかった。とにかく彼女は全身の血液が逆流するほど感情のボルテージを頂点まで飛翔させてしまっていたのだ。

「もう安心よ」

と優しく応える母の言葉を耳にした彼女は急に酔いが醒めたように落ち着いて、あんなに溢れた涙もきれいに乾いて、元の明るい笑顔を取り戻した。それを見た母は安心したように、もう一度、「もう安心よ」といって優しく娘の手を握った。

「私なんだか恥ずかしくって、あらどうしましょう」と、今度はしっかり母の顔を見つめて笑った。

「私ここにいる間、信じられないほど幸せだったのよ。他のことなど一切考えられないほど。その上、お母さまに会えるなんてまるで天国で夢を見ているようよ」

後ろの席にかけている人達がいっせいに拍手を送った。拍手を聞くまで彼女は彼らの存在をすっかり忘れていたので、我に返った時、思わず顔をさっと赤らめ、彼らに向かって恥ずかしそうにぺこんとお辞儀をした。

〈それにしてもこの人達、一体誰なのかしら？〉

と思った時、母が彼女の心を察したかのように、

「ここにいらっしゃる方達は皆んな、あなたが今日退院することを知って、わざわざ駆けつけて下さったのよ」
彼女はまだ視点が定まらないのか、彼らの顔をひとりひとり認識できないまま視線を全員の上に泳がせていたが、次第に彼女の心の中に昔のアルバムを見るようにたとえようもない懐かしい感情が沸々と湧き上がってくるのを感じ取っていた。
〈知っている、知っているわ。皆んな私の知っている人達ばかりだわ〉
「アッ、ワタル！　ワタルじゃない？」
その中に大学時代に特別仲のよかったワタルを見つけて彼女は狂喜して叫んだ。
「朝美！」
彼女はワタルの所に駆け寄り、両手を取って、嬉しさの余り、女学生のように両足でウサギみたいにピョンピョン跳ねて歓んだ。
「昔とちっとも変わっていないじゃない、ワタル」
「朝美もよ」
「どうしてここにいることがわかったの。久しぶりねえ。会いたかったわ。だって卒業して二、三度会ったくらいで今日までほとんど会ってなかったんじゃない」
「そう、私、卒業してしばらくしてからアメリカに行っちゃったからよ」

驚いたように眼を白黒させた朝美は、
「連絡してくれないんだもん」と少し顔をふくらませて言った。
「ゴメン、ゴメン、向こうで結婚しちゃって、すぐ子供ができたもんだから、手が離せなくってねえ」
「それでご主人もお子さんもお元気?」
ワタルの顔が少し曇ったのを彼女は見逃さなかった。
〈あっ、そうなんだ〉と、朝美はそれ以上深入りをしなかった。
彼女の周囲の人達に目を配ると、親戚の叔父さん、叔母さん、高校時代の担任の先生、他にも小、中、高と一緒だったクラスメイトが二、三人。昔住んでいた近所の美容院の奥様。次々と彼女は一人ずつ想い出してお互いに手を取り合って、まるで郷里に帰って一同が集まって同窓会でも開いているような気分になった。しばらく談笑を交わしていたが、母が彼女に「そろそろ皆様もお帰りになりますので」と言ったので、彼女は名残惜しかったが全員に何度も深々とお辞儀を繰り返した。するとどういうわけか全員がクスクス笑うのだった。
〈私が米つきバッタみたいにペコン、ペコンと何度もお辞儀をしたからかしら?〉

「さあ、朝美ちゃん、これからお母さんと一緒に行きましょう」
と母は朝美の腕を取って部屋を出ようとする。
「私、ナースの方にちゃんと外出許可をいただかなくちゃいけませんわ」
「大丈夫ですよ。お母さんがちゃんとあなたの退院手続きをしておきましたから」
「退院？」
「そうですよ、あなたは今日で無事に退院できるようになったのよ」
「お母さま、私はどうしてこの病院に入院していたの？」
「あとでちゃんと説明して差し上げますからね」
二人が部屋を出ると同時に、全員がぞろぞろと見上げるほど高いドーム型の天井のある玄関の方に向かった。彼らの後ろ姿を追いながら彼女は、ワタルに大きい声で、背伸びをしながら、
「近いうちに会える？」
と背中越しに訊いた。ワタルは振り向きざまに、
「いつでもよ」
と言って昔やっていたように五本の指を小さく閉じたり開いたりしながらバイバイの挨拶を送った。

母は、表に車を用意しているので、さあ一緒に帰りましょうと言って、彼女を車の所に案内した。

「あら、昔お母さまが乗っていた車じゃない。まだ乗っているの。なんて物持ちのいい人」

今では全く見られない古いタイプの国産車が病院の玄関の脇に駐車してあった。

〈そういえば私、一度も外に出ていなかったわ〉

外の大気はとても気持ちがよく彼女は思わず、

「いい香りのする空気だわ。舌の先に味まで感じるわ。瓶詰めにして持って帰りたいくらい」

「本当に美味しい空気でしょう」

「私、何もいらない。この空気さえあれば」

「ホッホッホッホッホ」

母は軽やかに唇の先で笑った。そんな母を見ていると、彼女は心の芯から、

〈私、本当の幸福を味わっているわ〉

としみじみこの瞬間に生かされている自分を愛おしく思った。

〈それにしてもどの位、私、入院していたのかしら〉

こんな疑問が時々、頭をもたげるが彼女はなぜか必要以上に知りたいとは思わなかった。それとも想い出せないのだろうか。自分自身で「私のこと」を封印しているようにも思える。だが、その理由は彼女自身も知らないのである。

病室の中では想像できなかったが、病院の建物はヨーロッパの大聖堂を思わせる巨大な建造物で黄金色に輝いており、背景の空の蒼（あお）がこの建物を一層引き立てていた。建物は何層にもなっていて、各階層ごとに南国の植物で彩られたテラスが建物をぐるっと一周しており、上層に行くにしたがって螺旋を描いていた。建物の黄金色とテラスの鮮やかな緑の樹木の配色がとても美しく、アトランティスなどの復元図に見るような絢爛たる煌（きら）びやかさに彼女はしばし眼を奪われていた。

〈ここはもしかしたら外国かしら?〉

と思ったが、私に会いに来てくれた人達がわざわざ外国まで来るはずがない。

〈やはりここは私の知らない日本のどこかに違いないわ〉

この大病院は広大な谷間の中央に位置していた。建物の広い前庭の真ん中には大きい噴水の池があって、霧のような飛沫が彼女の顔をひんやりとさせた。池の周囲には黄金の彫像が何体も立っており、この建物と見事に調和している。建物を背にして前方を見ると、波を打ったようにうねった丘が幾重にも広がっていて、こんもりとした小さい森

があちこちに散在しており、その近くには鏡のように光った銀色の池が森と同じ数だけくっついていた。この建物を基点に道路が放射状に何本も丘の上に伸びている。その先にはまるで城壁のように背の高い森が輪を描くように遠くからこの建物を囲んでいた。そのずっと先には頂上に雪をいただいた連山が水晶の原石のように肩を寄せ合ってまぶしく聳えている。彼女はアメリカの十九世紀にエマーソンの説いた光明思想を反映した雄大な田園風景を描いた絵の中に佇んでいる思いがしていた。

「さあ行きましょう」

母のうながす声がするまで彼女は呆然として、この心象風景のような一幅の眺めに魂を奪われていた。

「見事な眺めでしょう」

母は自分が創造主にでもなったつもりでさも自慢げにこの夢の王国のような美しい風景を讃えた。

「さあ行きましょう」

ともう一度母は彼女をせかすようにドアを開けて彼女を助手席に座らせたかと思うと車は滑り出した。

「お母さま、どこへ行くのですか?」

彼女はハンドルを握った母の横顔に尋ねた。
「決まっているじゃありませんか、あなたのお家に帰るんですよ」
「私のお家？」
「もちろんですわ」
「お母さま、私のお家ってどこにあるんですか？」
「あなたの知らない所よ。でもとっても素敵な所。きっと気に入ると思うわ」
〈私の知らない所？〉
母は私をからかっているのかしらと彼女は思って、
「お母さまって意地悪！　ちゃんと教えてちょうだいよ」
とすねて見せた。
「お愉しみはあとで……」
ご馳走が並んだテーブルに座らされてお預けをくらっているような気持ちになったが決して嫌な気分ではなかった。むしろ彼女は自分がファンタジーの世界に誘われていく童話の主人公さながら、浮き浮きして心が躍っていることに気づいていた。思わず口から鼻歌でも飛び出すほど、彼女は無邪気にルンルン気分になって、まるで遊園地の車にでも乗ってはしゃいでいるようだった。車は森のある丘の坂道を、見えない力で引っ張

CamScannerでスキャン

られるように登っていった。

〈私の家か……〉

「お母さまと一緒のお家？」

「じゃないわ。朝美ちゃん一人のお家よ」

「じゃあお母さまは？」

「私はあなたと違ってもう少し古風な家にいるのよ」

「そういえばお父さまは今日はいらっしゃらなかったわねえ」

「そう。お父さまは来られないわよ」

「どうして？」

「ホッホッホッホッホ」

母は意味ありげに笑うばかりだ。

〈いやなお母さまだわ〉

後ろを振り向くと、あんなに大きかった病院の建物が望遠鏡を逆さにして見たように谷間の真ん中で小さくなっていた。それに代わって目の前には黒い森が怖いようにぐいぐい迫ってきていた。彼女はこの森が自分に仕掛けられた大きい謎のように思えてならなかった。・この森の中に入れば「私の謎」が解けるのかしらと童話の世界の登場人物の

ように考えた。だけどこの森の奥行きは意外と浅く、あっという間に車は森を抜け出してしまった。森を抜けるとそこには大小様々で可愛い色とりどりの家が建ち並んでいて、絵の具のチューブから直接しぼり出したような鮮やかな色の花や樹木、それに家畜の馬や牛や羊、うさぎもいる。鹿の家族らがあちこちで動いているのが眼に留まった。前方の雪山は森を抜けた途端、さっきに比べると何倍もの大きさになって、今にも天空から覆いかぶさってくるほどの圧倒的な量感で迫ってきた。彼女は思わず「凄い！」と車の中で叫んだ。

「朝美ちゃんのお家はこの地区にあるのよ。といってもこの地区はうんと広いのでまだ少しかかるわ」

母は彼女の家に連れて行くことを愉しみにしているようだが、彼女はまだ不明瞭な残像のようなものが意識の底で揺らいでいることを少しずつ感じ取り始めていた。

「お母さま、私やはり何だか変なの」

「どうして？」

「なぜあんなに大きい病院に入っていたのかしら？」

「それはあなたの心身の疲れを癒すためにあの病院が必要だったからよ」

「私どこも悪くないというのに」

さっきまでは関心がなかった「私」自身について、彼女は解明をしなければならないような想いに突き動かされつつあるのを感じ始めていた。

〈私の謎解きが始まるのかしら。あの黒い森の何か神秘的な力が私を解明させ、そして開示させようとしているのかしら〉

「そう、今は快復して以前にもましてとても元気になったわ、お母さんはそのことが一番嬉しいのよ」

「どこが悪くて入院していたの?」

「病気で入院していたんじゃないわ」

「では、なぜ?」

「あなたがあなた自身に慣れるためだったのよ」

「……?」

「さあ、もう何も心配することはないわ」

「私、病気でもないのに病気になっている夢をあの病院で見たのよ。一場面だけの夢だったわ。でもその夢の肌ざわりがだんだん気になり始めたの」

「どんな夢?」

運転しながら母は彼女の方に頭を振り、興味深そうに訊いた。

「あの大きい病院とは比べ物にならない程の小さい、しかもとっても薄暗い陰気な病室に私、寝かされているのね。お父さまと妹のみずきちゃんが心配そうな顔をしてベッドの側に腰をかけているの。そこへお医者さまと二人のナースがやってきたわ。そしてそのお医者さまは私の手の脈をとったの。そこで夢は終わったわ。夢から覚めたら私はあの明るくて天井が高く広い病室にいたの。すると今しがた見た夢の記憶が次第に薄れ、何もなかったように私はまた元の気分のいい状態に戻ってしまったわ。でもお母さまと会ってこうして車で私の家に連れて行かれることが決まってから、また少しずつあの夢の情景があぶり出され始めたの。だから今こうしてお母さまにお話をしているのよ」

「朝美ちゃんは今のお話、夢だと思っているの？」

「だって夢ですもの。それとも幻影？　ああ、それからもうひとつ意識の中で強く反応している情景があるの。それはね、私の隣のベッドにいた女の子が読んでいた『不思議の国のアリス』の一場面でうさぎ穴に落っこちるシーンがあるでしょう。そこに私が落っこちたのよ。暗いうさぎ穴に私がどんどんどんどん下へ下へと引っ張られていくように落ちていく幻覚に襲われたんだけど、その感覚が頭から抜けないの。そして今の夢とこの落下していく感覚が私の中でダブって私を離さないんだけれど、これって一体どういうことなのかしら。お母さまにぜひ聞いてみたいのよ」

母はしばらく考えて、
「それはねえ、朝美ちゃん……」
「何、お母さま」
彼女はその理由を早く知りたくて、母に話の続きをせっついた。母は車のハンドルを握りながら眼を前方から離さないで真面目な顔で言った。
「朝美ちゃんが具合が悪くなって長い間入院していた時の記憶が夢になったのよ」
「長い間？」
「そう、長い間」
「どこが悪くって？」
「お腹に腫瘍ができたの」
「腫瘍？」
「つらかったわねえ」
「……？」
「お母さんもずっとあなたのことが心配で心配でならなかったのよ。お父さまはもっと心配されていたのよ」
「私、そんな病気の記憶などないわ」

「その内少しずつ過去のことを想い出してくるわよ」
「私、記憶喪失をしていたの?」
「最初は誰でもそうよ」
「お母さまが何をおっしゃっているのか私にはチンプンカンプンだわ」
「だけどそのうち何もかもわかってくるのよ」
〈お母さまの心の中がどうしても覗き込めないわ〉
「私のことを内緒にしたり秘密にしちゃいやよ、お母さま。はっきり言ってちょうだい。お願いだから」
「あなた、今こうしてお母さんと一緒にいることに何の不満もないでしょう」
「もちろんよ」
「そのうちあなた自身で気づく時が来るのよ」
「私、お母さまのその奥歯に物がはさまったようなものの言い方って好きじゃないわ。はっきり言ってちょうだい。お母さま、何か私に隠していらっしゃるようだけれど、私、腑に落ちないことがあるわ」
彼女は一瞬突き放されたような感覚に襲われて、喉の奥に物がつっかえたみたいに何

を話していいのか言葉につまってしまった。が、間もなく山の霧が晴れていくように記憶の扉がゆっくり開き始めるのを意識の底で感じた。そして今朝見た夢の情景が彼女の網膜の裏で現像液の中から印画紙に像が浮かび上がってくるように徐々に実体化してくるのを薄々感じ取っていた。今こうして再現されつつある光景では、病室の天井に近い位置から見下ろすようにベッドに横たわっているもうひとりの彼女を眺めていた。彼女のベッドの周囲には夢と同じように父と妹のみずき、それに医師と二人のナースが彼女を覗き込んでいるのを彼女はさらに高い位置から俯瞰しているのだった。

〈私が三人いる……。ベッドに横たわっている私。それを宙空から見ている私。この光景を思い浮かべている母の運転する車の中の私。一体どの私が本当の私なのかしら〉

入れ子構造になっているこの「世界」って一体何？　どこ？　彼女はもつれた毛糸の糸の端を探し出そうともがいているように思えるが、一方でいたって冷静であろうとする自分に信頼を寄せているのだった。夢の情景、あの大病院の光景、そして母と一緒に未知の「私の家」に向かっているこの現実。この三つの光景の因果関係がまだ彼女の中では謎のままである。

と同時にやっと彼女にもこの謎が解けた。

〈そう、記憶が蘇ってきたわ。私は胃ガンになって入院していたんだわ〉

「お母さま、もしかしたら私……」

「なーに？　朝美ちゃん」

次の言葉が口の中で押し合いへし合いして最初の一語が口の外に押し出されないでいる。彼女はもう一度言った。

「お母さま、もしかしたら私……」

母も同じ言葉を繰り返した。

「なーに？　朝美ちゃん」

〈思い切って言っちゃおう〉

「私、死んだんだわ！」

母にとってこの言葉は銃弾がガラスをぶち抜いたような衝撃で、きっと母の心を粉々に散乱させるに違いないと思ったが、完全に的がはずれた。

「あーら、よかった。お母さんやっと安心したわ」

「……？」

〈えっ？〉

見事に肩透かしを食らった彼女は母の横顔を穴があくほど見つめてポカンと口を開いたままだった。その母はといえば彼女に軽いウィンクを返しながら、

「やっと気づいてくれたのね。よかったわ。これで一件落着だわ」
「死んだんだわ！」と言った彼女も実は現実感に乏しかった。
〈私たち、禅問答をしているのかしら。それとも言葉のお遊び？〉
　母は彼女の心の中を読解したように、
「いいえ、禅問答でも言葉のお遊びでもなんでもないわ。これが現実ってことだけは確かですよ。あなた自身が事実に気づき、事実を認めることが最も大事なことだったのよ。お母さんもこれでやっと安心したわ。あなたがあなたの見たという夢の中の病院で息を引き取ったあと、しばらくしてあの大きい病院にやってきたのよ。というか移されてきたのよ。私もあなたと同じ病気で息を引き取ったあと、同じようにあの病院でしばらく休ませていただいたの。息を引き取っていきなりこちらの世界に放り出された場合、大抵の人は行き場を失って迷うので、あなたやお母さんみたいに長く患って亡くなった場合はショックを和らげるために生前と同じような環境で魂を癒すためにしばらく眠らされて、こちらで目覚めさせられるのよ。だからこちらで目覚めた当初は、何が自分に起こっているのか解らないの。だけど魂は充分に癒されているのでとっても気持ちがいいのよ。朝美ちゃんもそうだったでしょう。そしてしばらくした頃にお母さんやあなたの見覚えのある方達があぁして面会に行くことで少しずつ自分の死を認識することになる

CamScannerでスキャン

のよ」

「面会に来てくださった方達も、皆んなすでに亡くなられた人達だったのね」

彼女はしばらく言葉を失っていた。思考が停止していた。生の状態と死の状態の区別がまだ彼女の中で完全に認識できているようには思えなかった。

〈するとあの病院の隣の女の子も外国人の白髪の老人も死んでいたんだわ。女の子が帰ってこなかったのも私みたいに誰かに引き取られて退院してしまったに違いないわ。あの子は自分の死を認めることができたのかしら。またワタルがご主人と子供の話をした時、一瞬顔に陰りが走ったのも自分の死によって夫や子供を悲しませたことを想い出させてしまったに違いないわ。それから暗い穴に落ちる感覚は死の瞬間の体験だったんだわ〉

「お母さま、よーくわかったわ、私が死んだこと。そして亡くなったお母さまに久しぶりで会ったことも」

「やっと気づいてくれたのね」

「お母さまに会った時、私、懐かしさと嬉しさが先に立って、お母さまがすでに亡くなっていたことなどすっかり頭から消えてしまっていたのよ。夢の中で死んだ人に会っても、その人を生きている存在として見るのと同じようにね」

「だからあなたを驚かさないように、あなたが気づくまで待っていたのよ」
「ワタルやみんなが若く見えたのはどうして?」
「お互いが認識できるように、最後に会った時の年齢で再会するのよ。一種の変身ね。ウッフッフッフ」
「それにしてもこちらで味わっているこの至福感って一体どこからやってくるのかしら」
「地上的なしがらみから完全に解放されたせいよ。こちらの人は皆んな生き生きしているのよ」
「おかしいわ。死んでも生き生きなんて」
「オッホッホッホッホ」
「私、何だか嬉しくなってきたわ」
「もうすぐ私が用意したあなたのお家に着くわよ」
車のフロントガラスから透けて見える高原のあちこちには様々な様式の家が並んでいる。プールつきの庭のある家やテニスコートのある家もあるかと思うと、南国スタイルの茅(かや)ぶきの家もあり、樹々に囲まれた日本の農家もある。中には石だけで出来た中央アジア辺りのスタイルの家など、民族と時代を超えた様々な家が共存しており、まるで万

博の小型民族館が寄り集まったようだと彼女は思った。どの家も開放的で囲いのある家など一軒もなく、庭には気候を無視したいろんな植物が植わっている。それにしても光と空気が違うのか色彩が鮮やかで、ハーブのお店の前を通った時に匂う様々な香料が混ざったような香りが風に乗って車の中まで侵入してくるのだった。こんな美しい風景は外国のどこの国でも見たことがなかったと彼女は感嘆しているのだった。天使の姿こそないがこれこそ人類が夢想するユートピアなのかもしれないと彼女は思った。

「みんなこの地をブルーランドと呼んでいるわ」

と母は彼女の心に焦点を合わせて言った。

「ブルーランド……」

〈素敵。ブルーランドって。ここにぴったりのネーミングだわ〉

車がゆっくり停車して庭に薔薇がいっぱい咲いているレンガ造りの小さい煙突のある、まるで童話に出てくるような家の前に着いた。

「さあ、ここが朝美ちゃんのお家よ。童話好きのね」

彼女は感動のあまり言葉が出ないほど驚いて、車を降りるなり小走りで玄関に向かいながら、

「お母さま、これって私の趣味そのままじゃない！」

彼女はドアの金属製のノブを握ってそっと中に押し開いた。すると雲間から放たれた雷のような一閃が彼女の全身を黄金色に包んだ。と同時に何かが彼女の体にドスンと体当たりしたかと思うと病院から着たままのネグリジェのすそが腰の上までめくれ上がってしまった。彼女が子供の頃に交通事故で死んだゴールデン・レトリバーの雄犬ベアトリーだった。彼女はネグリジェがめくれ上がって下半身が露になったまましゃがんで愛犬の頭を抱きかかえ、「ベア、ベア」と何度も名を呼びながら頬ずりした。あの忘れもしないベアトリーの官能的な匂いだ。彼は嬉しそうに喉の奥をぐるぐる鳴らしながら彼女の頬のとめどなく流れる涙を長い舌で舐め続けた。

CHANELの女

CamScannerでスキャン

私はこの小説の書き手である。ここまで二本の短篇小説を書いてきた。これでおしまいにしてもいいのだが、ふと三作目の物語が煙の中でくすぶる炭火の赤く小さい炎のようにチロチロ蠢いているのを感じる。そんな遠い街の灯とおぼしき明かりを見つめていると再びペンを手にしたくなるのだった。とはいうもののまだ私の中ではこの小さい炎を一気に大きく燃やすだけの力がみなぎっていないのである。

何となく物語の輪郭が水に映ったおぼろ月夜のように薄ぼんやりとゆらゆら揺れているだけで、水面の月の影を手で掬い上げても小さい光の断片が粉々にはじき飛ばされてしまって、骨格を持った物語に仕上げるだけの自信がまだないのである。かといって構想がまとまるまでにどのくらいの時間を要するのかわからない。それ以前に、あきっぽい私はこの小説を仕上げるだけの忍耐力がないような気がする。だったら残り火が消え

ないまま見切り発車をしてしまうより手はないのではないかと心に言い聞かせて、さあ、出発進行としよう。

× × ×

墨汁を流したような漆黒の闇の中で虚空を必死に掴みながら悶え苦しんでいた彼を捜し当てて光の王国に引き上げて再会したのも束の間、彼の妻はある日忽然と彼の前からその姿を消してしまった。余りの突然の出来事に彼は完全に重心を失い、陽炎（かげろう）のように今にも空気の中に溶けてしまうのではないかと思うほど意識は希薄になりかけていた。彼の聴覚はもはや全世界の音という音を遮断して、恐ろしいほど深閑とした静寂の底に重くどんより沈んでいた。そんな中で幽（かす）かに振動しているのはソファーの上で丸くなって眠り続けている猫のマックスの吐息だけであった。

〈一体妻に、あるいは俺に何が起こったというのだ〉

物質としての妻の肉体がシャボン玉がはじけるように瞬時に消滅したのである。と同時に家の中の彼女の愛用品の全てが分解されて透明化してしまったのだ。

〈俺の硬直した頭では完全に理解の範疇を超えていた〉

唯物論者を自任する彼にとっては超感覚的現象とも思われる妻の消滅は人生の中でかって一度も遭遇したことのない未曾有の出来事であった。

　彼はすでに生の領域から死の領域という非物質界に移行しているにもかかわらず、それが実感できていないのである。このことが彼と妻の認識の差異であろう。妻はもはや彼と同次元で共存できないレベルの波動体に変容していたために、もはやここでは両者の間に親和の法則は成立しなくなっていたのである。彼女が夫の側から掻き消すように姿を晦(くら)ましたのは彼女の意志とは無関係で宇宙の摂理の作用によるものであった。そのことがなかなか飲み込めない彼は妻がまるで自分に対して三行半(みくだりはん)を突きつけて蒸発してしまったぐらいの、現世的な考えしかできなかった。

　あれから日が経った。といっても時間が地上のように直線的に流れていないので時間の感覚が全くつかめないのである。地上で四、五年前の出来事がつい一、二年前に感じられる経験は誰にでもあるが、それのもっと極端な感覚で、十年前がまるで昨日のように思えるのである。とにかくサルバドール・ダリの溶けた時計ではないが、ここでは時間そのものが溶解して、過去、現在、未来があたかも同一空間で平面化しているのだった。妻がいなくなった当初、彼は恐ろしく精神不安定な状況にあったが、創作が彼を運命的にこの状況から救ってくれていた。日課のように妻が入れてくれていたチャイは自

CamScannerでスキャン

分で入れることになったが、いつの間にかチャイが飲みたいと思うと何もしないのに目の前のテーブルの上にチャイが現れることがあった。最初は無意識のうちにチャイを入れて自分で忘れているのだとばかり思っていたが、この現象が度々起きるので、どうも自分の想念によってチャイを物質化させているらしいことに気づき始めていた。でも彼はやはりどこかでその考えを否定していた。とはいえ、彼は妻が消えたのも、もしかしたらチャイと同じ理屈で誰かが彼女を思念したために思念された対象の所に一瞬にして移行したのではないだろうかと、不確かな相手に嫉妬めいた、まことにけったいな妄想にとりつかれることがあった。想念が物質に影響を与えるくらいだから人間同士の間でこの原理が通用しないはずはないと考えた彼は、

〈では試しに妻を思念によって呼び寄せてみよう〉

と考えるようになった。何だか恐ろしい気がしないでもなかった。もし自分の思念が妻に通じて目の前に突然彼女が現れたら、幽霊が出現した以上に驚くに決まっている。仮に超自然現象を信じない彼が自らの力で妻を出現させたとしたら、彼の思想だけでなく今までの人生観まで転倒してしまうんじゃないかと恐れているのだった。

〈やっぱり、よそう〉

でも自分の能力を試してみたい気もあった。

〈やっぱり、やろう〉

彼はもの凄く神経質の割には優柔不断なところがあって、決断には時間がかかる人間である。それがとうとう念ずることになった。いつかテレビで見た巫女の仕草を真似て、眼を閉じて、両手を握り締め、妻をイメージして僧侶が活を入れるように「エイ!」と大きい声を上げた。彼の心臓は激しく乱打している。もし眼を開けて眼の前に妻が立っていたらどうしよう、と思うと、

〈やっぱり妻を呼ばなきゃよかった〉

と彼は眼が開けられずぶるぶる震えていた。

しかし何も起こらなかった。彼の大きな声にもかかわらず依然マックスはソファーの上で無心に眠っている。彼は妻が現れなかったことに空くじを引いたように落胆したが、一方ではホッと胸を撫で下ろすのだった。

〈念力の実験はやっぱり失敗か、俺はやっぱり超能力の才能がないんだ〉

なんだか彼は馬鹿げた遊びをしたような気になって、自分の理性を恥じるのだった。

〈超能力なんてデタラメもいいところだ。こんなもの存在してたまるものか〉

彼はこんな子供騙しのようなことを刹那的にでも信じたことを恥じ、自己嫌悪に陥った。

CamScannerでスキャン

〈お前はいいよなあ、何の悩みもなく、そうやって年がら年中ソファーの上で死んだように眠っているだけなんだから〉

マックスは時々彼が書いている原稿用紙の上につきたての鏡餅みたいにベタッと付着して寝そべり、仕事の邪魔をする。そんなマックスの甘えた態度を彼は結構歓迎したりもするのである。彼にとってマックスは妻の不在に代わってどんなに大きい癒しになってくれているかわからない。妻がいた時は二人で近所を散歩することがあった。かつて住んでいた杉並区の自宅界隈とよく似ているが家並みや住んでいる人達に誰も顔見知りはいない。だけど何度か顔を合わせるようになってからはお互い口をきくこともあった。大抵の人が彼と同じように一人暮らしである。年齢も性別もまちまちだ。時には小学生のグループに出会うこともあり、ここが死後の世界だなんてとても思えないので彼は今でも心の奥で自分の死に懐疑的である。

〈その点妻は俺みたいに悩むこともなく、『死んだんだから死んだと思えばいいんじゃないでしょうか』と自分の死を客観視しているんだなあ。単純というか、素直というか、純粋というか、素朴というか、無垢というか、無知というか……〉

と妙に感心しながら嘆息したりするのだった。

〈そりゃ俺だって死んでいる自分について考えることはあるさ。だけどこうして生活し

ている以上、自分が死者であるなんてほとんど忘れているよ。お互いに死について言葉を交わしたこともなかったなあ。あるとすればあの日彼女が消える寸前に語り合ったあの時くらいだよ〉

現世とよく似た風景ばかりだが、違うのは色彩が光に反射したようにキラキラしていることである。植物も生長していて生命力に溢れており、どの花もかぐわしい香りを発散させている。彼は自分が画家でないことを残念に思うこともあった。

〈そういえば俺だってこちらに来てから持病の喘息も出ず、腰痛も治り、むしろ十歳以上も若返ったみたいに健康そのものだ。どうして死んだ人間が生きていた時以上に元気になれるのか。不思議でならんよ〉

ひとりになってからというもの彼は出不精になってしまったが、ある日、珍しく思い切って街を抜けて田園風景の見える街はずれの丘の上までやってきた。今まで彼は書斎に閉じこもっていることが多かった。家に閉じこもってばかりいる人間は外的世界に恐れを抱く。

〈書斎を捨てて世界に出よう。外へ外へと。書斎を固定化すべきではない。もっと快活に、外に飛び出せ。光の中に〉

彼は自分に発破をかけた。彼は街はずれの丘の上から初めて見る谷間の、眼を見はる

ような美しい眺めにしばらく心を奪われた。頭上には一点の雲もない。久し振りに自然の息吹を胸いっぱいに吸い込んだ。谷間の底には様々な様式の家が別荘地帯のように小さな森や林に囲まれながら佇んでおり、小動物の姿も見受けられた。彼は水車小屋がいくつも並んでいる小川に架かった小さい橋の袂まで下ってきた。川底には水藻が長い尾を引きながら体をくねくねと悩ましくよじらせて踊っている。その間を小魚が群をなして我こそはと先を競って通り抜ける。彼は思わずしゃがんで小川の水を片手ですくい上げた。ひんやりした感触が指先から全身に走った。橋を渡った彼は迷い込んだ旅人みたいに初めての土地に恐る恐る足を踏み入れた。

彼は、前方に巨大な雪山の壁が立ちはだかっていることに気づかなかった。今しがた浮かび上がった蜃気楼かと思った。でも実際はすでにそこにあったのだが、彼の潜在意識が自然の中心と接合したために、彼の肉眼に初めてこの風景が映し出されたのではないか。彼はこの神々しい風景を前に、普段から宗教心もないのに、まるで神像にでも対峙しているような気分に襲われていた。そして彼の中の不透明な汚物が洗い流され、それに代わって創造的な力が流入してくるのを感ぜずにはいられなかった。彼は筋金入りの合理主義者なので、この経験を神秘主義的にとらえることはしなかった。体の中のカオスがぐるぐる渦を巻き始めて、その渦の中心から何かが立ち上がってくるのを感じた。

CamScannerでスキャン

妻に去られてからの彼はしばらくの間存在と非存在の間を彷徨しながら、何か確かなものにすがりたいという気持ちにしばしば襲われていた。そんな不安定な状態を回避するために小説に没頭したのだが、彼は今この雄大な自然を前にして、大自然に内在する超感覚的なものを見出し、その圧倒的な力によって自らが再生されていくように感じ始めていた。妻の欠落は大きかったが今彼はこの美の王国のような場所に立って彼女の欠落は自然の力で充分に埋め合わせられたと確信を得たように思えた。それが思い違いでなければの話だが……。

〈妻の不在にこんなに心を揺さぶられるなんて、俺は実にちっぽけで情けない弱い人間なんだなあというのをまざまざと認識させられたよ〉

彼はしみじみそう思った。

この地域の家々は別荘のように広い庭を持ち、家の周りには樹木が植わり、四季の花が同時に咲いていた。辺り一帯が林になっている。彼が向こうにいた時は空襲で家が焼かれ、終戦後何年かしてから当時まだ家が少なかった武蔵野の林の中に、両親が、さほど大きくはないが庭付きの高い木々に囲まれた一軒屋を建てた。でもその後、都市計画が加速度的に進み道路が何本も田畑の中を容赦なく切り裂き、あっという間にゴミゴミした住宅街に飲み込まれてしまった。その頃には両親も亡くなり、それまで妻と長い間

一緒に住んでいた夫婦のアパートを引き払い、高槻の住んでいた家に移って来た。でも住めば都というか家をなくした喪失感があるのか、妻はその家をこよなく愛おしんだため彼が新婚でここに来た時、自分の家をなかなか離れることができなかったのだという。その手前の家のきまりと、日の前には妻もやってくる。彼の死の日も午後に妻が見えたということは知らなかったのだから、自分の置かれている状況を現実的に認識しようとすればするほど、なかなか納得できなかったのである。第一、彼は自分がどこで死の床についていたのかさえ分かっていなかったのだから。妻に連れられて彼が家に着いた時、やっと我慢が治って退院することができたのだと思って安堵に胸を撫でおろしたものである。そして家に戻るなり彼はすぐさま入院前に書きかけていた原稿の執筆にとりかかったのだった。妻はこのように快復して再び創作に取り掛かった彼を非常な喜びで優しく見つめてくれているとばかり思っていたのである。

「あなたはいいですわね。そうしていつも原稿用紙に向かいながら他人の家庭を盗み見したり、どこかの恋人同士の間に割って入ったり、かと思うと旅に出掛けて見知らぬ女性と愛欲に溺れたり、見も知らぬ他人の死に関わってみたり。一体どこまでが創作で、どこまでが現実なのか。そんな人なぞいる世界じゃございませんがねえ」

妻はこんな皮肉ともつかない言葉を書斎の中に残して、

「夕食の買い物を兼ねて私ちょっと外出しますけれど、あなたもあんまり無理なさらないで休み休みお仕事をなさって下さいよ」

と玄関を出て行く姿は今も昔もちっとも変わらなかった。

死んだ夫婦が再び元の家で変わらぬ生活をしていることに彼の思想や観念がなかなか追いつかなかった。本当に自分が死んだかどうか、証拠物件を集めて、何とか確かめたいと思った。現にこのように肉体も健全だし、五感も働くし、記憶もしっかりしている。だが、いつまでも自問自答していても埒(らち)があかない。このレベルから早く卒業しなければならないと自らに言い聞かせ、迷路に入って半ば出られなくなった彼の形而上学から一刻も早く自らを解放する必要があった。そのためには彼は妻のように無頓着でいるのが一番ふさわしい生き方だと思うのだが、彼はまだ自己中心的な考えを崩すことができない自分を知っているのだった。

〈在るものは在る。ないものはない〉

この単純さでいいじゃないかと彼は禅の悟りを得たようなフリをするしかなかった。でなきゃここで生きていくのは不可能だと妻の受け売りをしてみたりもするのであった。

一旦悟ってしまえばここの生活は実に快適である。だからここで生きている人間はある意味で個々の次元で諦観するか、自らの運命を全面的に受け入れるしかないのである。

懐疑と抵抗と主張で欲望むき出しの自己中心で生きていた現世とは正反対である。現世の人間からすれば物足りないが、現世の様々なしがらみから解かれたこちらの人間にすればこの物足りなさが実に快適なのである。同じ往くなら地獄の方が面白い、天国はあくびが出るほど退屈極まりない所に違いないと言う知識人は万といるが、ここにいる人間は頭から目的意識や結果をはずしているのでこれという悩みもなく日常がすっかり天国に見えるのである。

〈実にのんびりしたものだ。作家の俺がこんなことを言うのはなんだけど、これじゃ隠居だって逃げてしまうぜ〉

これという目的も持たず、人は人、我は我、嫌なことはしない、好きなことだけをするという、アホな世の中を社会の中に沈めて見つめるスタンスは、考えようによれば死の準備であり、死後の世界のシミュレーションではないかと彼は最近つくづく考えるようになっていた。とはいうものの彼は現世の人間でもなく、疑いもなく死者だというのに死の実感が乏しいためにどことなく中途半端な恣意で沈滞しているのだった。死んでから気づくのではなく、本当は生きている間に気づくべきだったかもしれないが、現世では現世の慣例に従う方が生きやすい。まあそんな生き方をした結果が今置かれているこの環境である。そんな彼からすれば彼の妻は変わり者のように思えた。というのも現

世のルールからはみ出していたからだ。彼女は妻としては申し分なかったが、現世に対する現実感が希薄だった。彼女はいつも、いるのかいないのか、何を期待することもなく、いつまでも月を眺めて時を過ごすことに飽きない『徒然草』のような女であった。

彼女は口癖のように、

「私はこの世に遊びに来ているだけなの」

と言っていた。

「お前はかぐや姫か。夜になると月ばかり眺めて……」

彼は妻の側でチャイをすすりながら、心ここにあらずの彼女の濡れた瞳の奥に映った月を眺め、しみじみ語ったものだ。そんな彼女の表情には、此岸も彼岸も突き抜けた安らぎの気配が漂っていた。今になって思えばこちらで彼女は二度目の死に這入(はい)ろうとしていたように思われるのだった。そしてそれが消滅という形で実現された。

目の前の壮大な銀嶺が彼を現実に戻した。

〈わが家もここの別荘地帯に移すべきかな〉

と考えながら公園に通じる小径を歩いていると前方の小さい森の入り口のベンチに一人の白い口髭の老人がイーゼルにキャンバスを立てて写生をしているのが眼に入った。

彼は老人の後ろからソーッと気づかれないように近づいて行った。老人は彼に気づいていないのかせっせと絵の具のついた筆をキャンバスにツッツッと叩きつけるように色を置いていた。印象派風の絵だが、その色彩の美しさと鮮やかさは、色彩派のボナールの絵でさえくすんで陰気に見えるほど、老人のキャンバスの上を走る色は光り輝いているのだった。彼は思わず声を出した。

「素晴らしい！」

老人はゆっくり振り向いて、深い皺と髭の顔で微笑んだ。

〈この爺さん、結構老けて見えるが、実際は俺と大して変わらないんじゃないかな〉

「素晴らしいのはわしの絵と違ごうて、自然なんや。その自然がわしに絵を描かしよるんや。わしの精神が求めとるもんは自然がわしに与えてくれる。自分の求めるもんはなんぼでもその辺にころがっとるんや」

「画家は自然を相手にできるから羨ましいですね」

彼は色彩でいえば灰色のような人生の苦悩を売り物にしている小説家という職業を思わず恥じた。

「あんたはんは……？」

老画家の言葉が終わらないうち、

「私はつまらん小説を書いています」
と彼は答えた。
「小説家の先生かいなあ」
老画家は彼が小説家と知って興味を持ったのか、無防備な子供のような笑顔に変わって、描いていた筆を止めた。そして体をベンチの端に移動して彼に横に座るように促した。
「制作中お邪魔をして大変失礼いたしました」
「わしも、ちょうど一服したいと思っとったところや」
老画家はパイプに火をつけた。彼も「それじゃ」と煙草を口にくわえた。
「絵にも描けない素晴らしさというのはこういう風景のことを言うんですかねえ」
「小説家の先生ちゅうのはおもろいこと言いますなあ。この絵描きのわしをつかまえて、絵にも描けへんとは、アッハッハッハッハ。いやーっ、実におもろい」
「イヤーッ、そんなつもりではなくって……」
「わかってる、わかってまんがな。ほんまに絵にも描けへん風景ですわ。自然とわしという全存在は分かちがとう結びついとるんや。せやから昔の画家は自然を模倣したんやと思う。せやけど、今はこんな理念は古臭いんやろな」

「自我を認識したからでしょうね」
「自然に拘束されとることに気ィついたんちゃうか。小説も同じ道をたどっとるんちゃいまっか、なあ小説家の先生はん。人間の内部に新しい世界観を創ってそこから人間の願望ちゅうやつを生むようになったんや。せやけどここの自然に触れるとなんでかわしは古代に戻って古代人がやりよったことをもう一回試してみたくなるんや」
「初心に戻るんですかねえ」
「人類の初心にや。もう一回人類の絵画の歴史をはじめから学ばんとあかんのや」
「頭の痛い話ですなあ」
「小説家の先生はそんなことせんかてよろしい。小説の歴史は絵に比べたら新しいもんや。わしみたいな絵を小説で書いたらつまらん。きれい事ちゃうもっと人間のやらしい本性を吐き出してくれまへんと」
老画家は話を止めて美味そうにパイプをふかしている。ベンチの後ろの木立にいつの間に集まったのか、小鳥の群が頭上でいっせいに唱和するように鳴き始めた。まるでグレゴリアン聖歌だ。それに比べれば地上の小鳥達は何本ものテープを同時に早送りしたようでやかましいだけだ。
「話違いまっけど、小説家の先生はこの近辺でっか」

「いやあ、この谷間の向こうの丘の上にある街はずれですわ。散歩がてらに足を伸ばして来たらあんまり素晴らしい眺めなのでついここまで入り込んじゃいましてねえ。先生は?」

「わしか? わしの家はあそこに見える、あの山小屋や。アトリエ兼住いの素朴なもんや。貧にして楽しむ、ですわ」

「奥様とご一緒に……?」

「ちゃう、ちゃう、チョンガーや。嫁はんはわしがここに来るずっと前に死によった」

「お淋しいですな」

「そんなことあらへん、あらへん。もう昔のこっちゃ、忘れてもた。後で来たわしやったけど、そりゃあ初めの頃はちょくちょくあいつに会いに行きましたわ。せやけど嫁はんの方からはわしの方にはよう来られまへんのや」

「それはまたどうして?」

「いやあ、来よう思うても来られへんようになっとるらしいんや」

「来られない……?」

「誰かがそんな法則を作ったわけちゃうと思うけど、自然にそうなってしもてるんや」

「どういうことですか」

「まあ自然の摂理みたいなもんや、理屈はようわかりまへんけど」
「会える側と会えない側の人間の条件ってあるんですかねえ？」
「条件ちゅうのか、二人がおる階層が違っとる場合、上から下へは行けるんやけど、その反対はどうも無理らしいんや」
〈俺が妻に会おうとしても会えないのも俺の階層が下だからか？〉
「上下関係が働くんですかねえ？」
「ここではなあ、先生、地上の上下関係は全然当てはまらんようになっとりますわ」
〈すると俺と妻の関係は全く逆転したってわけか。彼女の方が俺より上だったのか。それにしても彼女はどうして俺に会いに来ようともしないんだろう？　彼女のことだ、きっと小説に没頭させるために来ないんだろう。でもチャイぐらい入れに来てもいいじゃないか〉
「立ち入ったことを聞きますが、奥様はどこで何を……？」
彼は参考のために話を聞きたいと思った。
「わしが初めてここに来た時ははんま日参したもんやでえ」
「それがどうして会わなくなったんですか」
「やっぱり考え方の違いがこっちに来てからはよけいはっきりでてきてしもて、向こう

におった時みたいにあいまいにでけんようになったことと、嫁はんは嫁はんであいつがいる環境が、自分なりに気に入りよったんやからかなあ。わしのいるこっちの方がなんぼええとこや言うても、

『そっちの絵みたいにきれいな所よりも、好き勝手に思うような生き方のできる東京のごみごみした汚れた空気を吸って生きている方があたしには似合っているの。あたしにとってはここが天国なのよ』

と言うんや。あいつのおる東京ちゅうとこは現世と区別がつかんほど酷似しとる。ただし、街全体が曇ってて、日がな一日黄昏ていて薄暗くてどんよりしとって、それでもあいつは生きとった時とおんなじとこに執着しとるんや。そこを天国やというんやから関東の女にはもうわしも何んも言えまへんわ。あいつはあの世千日この世一日ちゅう考えやから、今がよければそれでええんや。

『あなたは芸術家であたしより美を愛して来た人だからそこがお似合いよ。あたしのように元々水商売上がりの女には非現実的な生き方は向いてないわ。すでに現世で死別した間柄の男女がもう一度よりを戻すなんて、怪談噺じゃない。もうお説教は結構。あたしになんか未練持たないでそっちのきれいな風景に似合った美人とでも一緒に暮らしてちょうだいよ』

あいつは別の男と所帯を持っとる。なんちゅうてもあいつはわしより三十も若い女やから、そりゃ若い男の方がええに決まってまんがな」
「立ち入ったことをお聞きしますが奥様とはどこでお知り合いになられたんですか」
「聞きたいんでっか？　小説家は何でも小説の種になりまっさかいになあ、こりゃ失礼。ハッハッハ。わしがパリに住んどった時に行きつけのカフェーで知り合うた女や。わしの芸術観をちょっとかじっとるもんやから、
『肉体の官能こそあたしの芸術だわ、あなたとあたしの芸術観が違うのよ。まあお互いに異なる芸術の道を追求しましょうね』
と言いやがる。それで最後やと思うてわしも二度とあいつを訪ねんようになったわけや。去る者は追わずですわ。一回死んだもんがお互いに生きとるちゅうことがわかっとっても、一旦死の壁を超えた瞬間からはその人間の根性がまる見えになるので、己が己を裏切ることができんようになるんやなあ」
老画家はゆっくりであるが心の奥にしまっていた妻に対する想いを嚙み締めながら彼に話した。彼はこの老画家の話を聞きながらわが夫婦の運命についても無関心を装うことができなかった。
〈そうか、すると俺の方からは呼び掛けられないけれど、妻の方からは俺の存在は把握

されているのかもしれない。彼女が俺に会いたがっているかそうでないかは彼女の胸の内にしまわれていて、俺はただ彼女の出方を受身で待つしかないのか。それとも老画家の細君のように俺も妻に対する未練を断ち切って、一途に創作活動に没頭するべきかもしれない。一度死別を経験した者が、再び生き別れの羽目にあっているというこのおかしな道理にどう対処すべきか今の俺には全く考える術がない〉

「ところで、そこに置いてあるスケッチブックを拝見させてもらえますか」

さっきから気になっていた絵具箱の側に置いてある大きいスケッチブックを彼は見たくなった。

「スケッチブックの中にはさんどる絵は今のと違ごうて、わしの餓鬼の頃に描いたもんばっかしやけど。ほんまに見たいんやったら見てくれてもええでえ」

中を開いてみると模写が二十枚ほどあった。岩見重太郎がヒヒの上に跨って今にも短剣をヒヒの喉元に突き刺そうとしている武者絵が実に克明に模写されており、とても子供が描いた絵とは思えないほどデッサンも正確で、その上実に力強い表現だ。他には三人の中国の唐子が豚と戯れている絵。緑の芝生の上に白馬が横向きに立っていて、馬の体に油絵のように白のクレヨンでコッテリと厚塗りされたもの。さらに戦前の乗物画集から模写したもので、チンチン電車と呼んでいた頃の都電や乗り合い自動車や木炭車、

高架には省線電車が走っていて、その背景には銀座の時計塔やアドバルーンの上がったデパートなどのビルが積み木のように立ち並んでおり、細部まで詳細に描写されている。他も概(おおむ)ね絵本を模写したと思われる絵ばかりだったが、並外れた才能があふれ出ていた。
「わしが大阪から上京して間が経たん時におやじが死によって、ほんで四十年連れ添ったおやじを亡くしておふくろは大阪の家を売って家財道具のなんぼかをおふくろの播州の親類の家に預かって貰ろうたんやけど、その時、わしの子供の時に描いた絵も一緒に預けよったんですわ。そうこうしとるうちにおふくろも死んで、親類に預けた家財道具も知らん間に勝手に処分されてしもうた。ある時わしは親類の家を訪ねてせめて子供の頃のわしの絵や大事にしとった蒐集品だけでもと、引き受けに行ったんやけどなあ……。ここから先の話はわし想い出すだけで涙出よるんさかいにもうかんにんしてもらうわ」
「何があったんですか……?」
老画家の眼の奥に光るものがあった。
「結局全部燃やされてしもたんや」
「………」
親類の者がどうせ子供の絵や持ち物だ、大した値打ちもない、荷物になるだけだと、

ミカン箱いっぱいに詰まった老画家のお宝を全部焼いてしまったのである。それ以来彼はこのいまいましい記憶を長い間心の奥に封じ込めていた。

「それがやなあ、わしが死んでここに来た時、燃やされたはずのミカン箱に詰まっとった絵がそのまんまわしの丸太小屋の中で見つかったんや。そりゃわしは嬉しゅうて嬉しゅうて、それからちゅうもん、どこへ行くにもこの子供の頃の絵をこないしてスケッチブックの間にはさんで肌身離さんと持ち歩いとるちゅうわけや」

「ああ、そうですか……。向こうで焼失してしまったものがちゃんとこちらにやってきていたというわけですね」

「せや。人も物も皆んな同じやで。人が死んでもこっちでこないしてちゃんと生きとるみたいに、たとえ物が死んでもこっちで生きることができるちゅうことがわかったんや。せやからわしらは何ひとつ失うということがあらしまへんのやで。ところで、もし先生が時間があるんやったらわしのアトリエでお茶でも飲まんかいな」

「絵の方はいいんですか？」

「景色はこないしていつも同んなじ場所にあるさかいに、どこにも逃げへん」

言われてふと前方を見ると、さっきまであったはずの巨大な雪山がない。

〈やっぱり蜃気楼だったのだろうか〉

「でも景色が消えるってことあるんですか？　ここでは」
「わしとあんたが同じ景色を見とるということはここではないかもしれんな。まあ先生の心の願望が景色に投影されるちゅうことはそらあるわなあ。それは先生が創った景色で、そんなもん実体ちゃいますわ」
〈すると「人が今見ている景色も必ずしも同じものではないというのか〉
「はな、わしのアトリエに行きまひょ」
老画家のアトリエに向かう道の途中にある家の芝生の庭で回転する噴水の水の粒子が、スプレーをかけたみたいに頬に心地よくはじけた。アトリエの外観は丸太を積み重ねた造りだが内部も外部と同じである。丸太の壁には数点の絵が掛けられていた。どの絵も女性の肖像画だ。
「先生、この肖像画の女性はなかなか美人ですな。女優さんですか」
「まあ、そんなところやなあ」
「生きている人ですか」
「うーん、そうやなあ、死んどっても生きとるちゅうのか。せやけど小説家の先生はん、絵ちゅうのは対象の人物を描きまっしゃろ。はんならその瞬間対象は死んで、その代わりにわしの絵の中に生きよるんや。対象の女は画家によって内的に殺されたも同様なん

や。せやから彼女は芸術的に死んだことになるんや。そう思いまへんか、小説家の先生はん」

（わかったような理屈を……。この老いぼれ絵描きはよくはだすわい。全く）

「小説では本当に殺せますがね」

「絵は違うんや。実を描き切ってしもうて対象を死なせる。そないして絵の中で再び甦らせんとあきまへんのや」

「此岸と彼岸の関係ですね」

「まあ、そんなとこやなあ」

部屋の中の調度品は全て木製である。テーブルも椅子も食器棚も隣室に見えるベッドも何もかも木造で統一されていた。椅子に腰をおろすなり老画家はどこからともなく湯気のたったコーヒーを運んできた。香ばしい香りが鼻の先を撫でて通り過ぎた。この見知らぬ老画家を前にして何から話をしていいやら戸惑っていると、

「小説家の先生はここに来て長いんでっか」

と聞かれた。

「長いといえば長いし、短いといえば短いし……」

「ああ、そうやったなあ。ここは。まいった。まいったわ」

CamScannerでスキャン

「全く」
〈俺も彼のように妻の話をするべきなんだろうか。別に相手が聞いてもいないのに自分からペラペラしゃべることもあるまい〉
するとと老画家が彼の心の中を察知したように聞いてきた。
「先生はやっぱりひとりもんでっか?」
「そうです。チョンガーです」
「チョンガーは気楽でよろしいなあ。この界隈に住んどる大抵の人は一人暮らしで、男も女も独身を謳歌しとりますわ」
「女性もですか?」
「勿論女の一人暮らしもおる。先生はひとりで淋しいのと違いまっか」
「ああ……? まあねえ」
「こっちで結婚した者も何組かおりまっせ」
「こちらで結婚、ですか?」
「自由恋愛やからなあ、ここは。ところで最近一人の女がこの地区に移ってきよりましたんや。彼女とは行ったり来たりの茶飲み友達や。もしよかったら会うてみまへんか」
「ええ、ぜひお会いしてみたいもんですな」

「せやったらちょっと呼んであげまっさ」
と言って空になったコーヒーポットを持って開け放されたベッドルームの方に行ったかと思うと、さほど時間も経たない内に玄関のドアをノックする音がした。老画家がベッドルームから出てきて玄関のドアを開けると、CHANELの香水の香りと共に一人の中年の美しい女性が立っていた。
〈えっ、もう来たの？　隣の家の人なんだろうか。それとも……〉
中央で分けて首の辺りで外に軽くはねた髪は濃い栗色に染められていた。眼が大きく、広い額の下にはカモメが翼を広げたような眉が懸かっていた。鼻は高く、口紅が横に真一文字に引かれ意志の強さを表しており、ワンピースの薄い水色はローズ色の唇と見事にマッチしていた。靴は金色のサンダルである。その金色がまた彼女の栗色の髪と調和し、清潔で知的、さらに大きい黒い瞳が彼女の情熱的な性格を象徴しているように思われた。彼は彼女が誰かに似ていると思った。
〈そうだ、部屋の壁に掛かっている肖像画の女性ではないか〉
「彼女、原節子に似とりまっしゃろ」
そう言われて見ると、たしかに原節子そっくりだ。
彼はこんな容姿美麗な人がどうして死ななきゃいけなかったのだろうとふと思った。

CamScannerでスキャン

まあ色々事情があるとしても彼女の秘密の扉を開いてみたい衝動にかられた。作家の職業意識がそうさせるのである。

「先生、そんな天下の美女と比較しないでちょうだい。私恥ずかしいわ」

すがすがしいよく通る声だ。

「この人はさっき会ったばっかりの小説家の先生なんや」

老画家が彼を紹介した。

「へっぽこ小説家です。俗世間にどっぷりつかったね」

読書が趣味の彼女は小説家と聞いて胸がときめくのを覚えた。

〈もしかしたら私の知っている小説家かもしれないわ。先生に恥をかかせないように、私の方から先にお名前を言って差し上げなきゃ。それにしてもいつ頃お亡くなりになった先生かしら〉

彼女はすでに亡くなった小説家の名前に記憶を総動員させながら目の前の小説家と名乗る人物をまじまじと眺めた。小説家は小説家で彼女が自分を知ってくれていることを期待しているようでもあった。

「あっ、もしかしたら……」

〈間違いないわ、上野孝次先生だわ、母がよく読んでいた――〉

「先生、上野孝次センセイでいらっしゃいますわねぇ」
彼は内心胸を撫で下ろしたが、表情は逆に気取った調子で、
「ハイ、上野広小路でございます」
と答えた。
「エッ!? あら私お間違いしたかと思いましたわ。先生ってこんなに面白い方でしたの
……」
『清貧の思想』を書いた中野孝次とは全く赤の他人です」
上野孝次はてれながらこんな冗談を次々と飛ばすのだった。
「俗を売り物にしておられるようやけど、この先生なかなかカタイところもあるんやな
いかなあ。それはそうと先生はそんなに有名な小説家でしたんか。わしはもうここに来
て随分長ごうなりますからなあ、今の世の中にはどうもうとくてねぇ」
「私、まさかこちらで上野先生にお目にかかれるなんて、大変光栄ですわ」
「冥途の道に王なしゆうて、人間死んでしもうたら有名も無名もあらへん、皆んな平等
や」
「でも先生とお会いしたことであちらの世界とこちらの世界がひとつになったような気
がいたしますわ。私達って実は二つの世界に住んでいるのと同じなんですね」

「だからおもろいのと違いまっか」
「私はこちらに来る前は七年ほど地獄におりましてなあ」
「エッ？　上野先生が地獄にですって？　まあ先生はご冗談がお好きなんですねえ」
「小説家ちゅう人種は、生きながらにして地獄に住んでるようなもんでっしゃろ。名誉欲が強ようて悪徳で大法螺吹きやから。そやさかいに小説家ちゅうのは皆んな地獄に堕ちまんねん、ハッハッハッハ」
「全くおっしゃる通り」
「それは小説の中だけのお話ですわよね、先生」
「実人生と虚構の区別がつかん奴はあきまへんでっしゃろ」
「でも日本人には私小説的タイプの作家がやたらと人気があって、またファンが多いんだなあ」
「私、若い頃は太宰治のファンでしたわ」
「それご覧なさい。ここにも一人こういう日本人がいるじゃないですか」
「私小説作家はだめですの？」
「聞いて、聞いて、あたしの人生を、というアメリカ人の女みたいで、そんなに自分の人生に興味あるのかねえ」

「コンプレックスを売り物にするやつは創造力の欠如や」
「ところでお嬢様は……」
「あら私のこと……ですか？　私、お嬢様って言われるほど若くありませんわ」
「じゃあ私の見た目で判断するとしましょう」
「小説家って人種はうそつきがおいさかいになあ」
「まあ作り話でめし食ってますからねぇ。ところで貴女はおひとりでお住まいですか？」
「用心しなはれよ、小説家はんには」
〈主人とはとっくに離婚しているけれど、上野孝次先生には私の方からもウソをついてやりましょう〉
「ひとり住まいですわ。でも主人はまだ向こうにおりますの」
〈亭主持ちか。そういう俺にだって妻がいるが、うちは複雑な夫婦関係だよ、全く〉
「上野先生は、確か奥様もお亡くなりになりましたわねぇ。今はご一緒なんでしょう」
「おや、妻が死んだことまで……。私より詳しいですな。だけど目下やもめ生活ですわ」
「奥さんと別居でっか？　そりゃ淋しいやろ、女房は家の大黒柱といいまっさかいに。はんならわしと一緒や」

「先生とちょうど反対で私の方から妻に会うことができないんですよ」
「ほんなら何かいいな。奥さんの方が階層が上ちゅうことでっか？」
「じゃあ、上からみればここは地獄かしら」
「そんなアホな。地獄なんかあらへん。もし地獄におる人間がおってそこが住みいいんやったら、そこはその人間にとったら天国ですわ。ほんまの地獄はこちらではのうて、現世かもしれまへんで。地獄極楽はこの世にありと言うやろ。なあ、小説家の先生はん」
「全く、その通り」
「地獄っていうのは第三者が決めるもので、本人には認識されないんですの？」
「まあ、そういうことやろなあ。下手するとここかて小説家の先生の奥さんから見たら地獄に見えるかもしれまへんでえ、エッヘッヘッヘッ」
「ここが地獄だなんて、私信じないわ。こんな美しい地獄なんて存在しませんわ」
「ここが天国やゆうても何の刺激ものうて、反復の繰り返しばっかりで、退屈で退屈でそのうち退屈死するかもしれまへんで。退屈も度が過ぎるとそこかて地獄にならんとも限りまへんからなあ」
「ところで上野先生の奥様は今どこにいらっしゃるのかしら。ここよりもっといい本当

の天国にゃ、私達はここが天国だと思ってますけど、もっと素晴らしい天国ってあるのかもしれませんわねえ。神様と一緒に住んでいるような天国がね」

「私にはわかりませんなあ。最初は一緒に住んでいたんですが、ある日突然、妻が蒸発しましてねえ」

「えっ、蒸発ですって？」

「小説家はんは言葉で遊びますからなあ」

「まあ、私の想像ではここより上に行ったような気がしますな」

「そりゃここでも結婚もあるかわりに、当然離婚かてあってもおかしいことあらへん。絵描きもそうやけど小説家も極道者やから、わしみたいに捨てられたからゆうてもちっとも不思議じゃない」

「上野先生はその後、奥様からのご連絡はないんですか？」

「今の今まで書斎で一緒にお茶を飲んでいたと思ったら、私の眼の前から忽然と煙のように消えましてね、奇術を観ているようだった。それ以来消息不明ですよ」

「あら不思議」

「不思議でも何でもあれへん。このわしかて嫁はんの前から忍術でも使ったみたいに煙と一緒に消えてしもうたんやから」

「煙が出るんですか？」
「あんさんはおもろいなあ。煙ちゅうのは比喩や」
「ヒュー、ヒュー」
「上野先生って真面目な顔でニコリともされないでご冗談ばかりおっしゃる」
「芸術家で真面目な奴はあかん。不真面目な奴もあかんけど」
「芸術家って本当に楽しくって面白いですわ。私大好きだわ」
「わしに惚れるんやったら今のうちやで。ほんでなかったらわしかていつ消えてしまいよるかわからん。その時は天国からあんたを迎えにきてあげるさかいに」
「その節はよろしくお願いいたします。ところで先生は消えてどこへいらっしゃったんですか」
「決まっとるやないか。ここに来たんやがな。幽霊みたいにここに出現したんや」
「エーッ、幽霊」
「死んだら皆んな幽霊やで。あんたかて美人の幽霊や」
「生きている人から見れば私達は透明人間かもしれませんね」
「透明人間同士にはちゃんとお互いに姿が見えるんですな」
「さすが小説家の先生はええことを言いはる」

「ところで先生、どうしたら消えることができるんですか」
「初めはわしも前に死によった嫁はんと一緒やったんやけど。しばらくするうちにあの気が遠くなるような薄暗い黄昏東京の街が居心地悪うなってしもて、イヤやイヤやと思っとったら、途端に觔斗雲（きんとうん）がやって来よって、それに乗ってここに着地したっちゅうわけや」
「觔斗雲ですか？」
「ヒュー、ヒュー」
「あら、比喩なのね。先生方はふざけてばっかり」

× × ×

私はこの小説をここまで書いたもののこの先の物語をどう展開させていいものやらハタと行き詰まってしまった。小説家・上野孝次は原節子に似た女性に少なからず好奇心を抱いているようだ。また彼女も上野に好意を持っている。二人とも一応こちらでは独身だ。上野には妻がいるが、失踪したままでかなり月日が経っているようで一向に現れる気配がない。仮に現れたとしても再び同じ屋根の下で暮らせるとは限らない。また一

方、上野は知らないが、この女性は夫と離婚して、れっきとした独身だ。そう考えると上野と彼女の間には接点があり、愛が芽生えていつしか恋に落ちないとも限らない。一般的な小説ならきっとこのような筋道をたどるのが常道ではないだろうか。また読者もそれに大いに期待するに違いない。しかし読者はハッピーエンドを期待しながら一方で破局を望む。だがこちらの同じ領域内では親和力が支配しているために現世のように考えが対立して破局に至るということは滅多に起こらない。つまりドラマが成立しにくい環境なのである。最も小説に不向きな状況とも言える。できれば小説家・上野孝次に小説を地で行ってもらうしかない。私小説を否定している上野に頼んでも恐らく小説にならないに決まっているが……。途中まで書いてここから先は進みませんでは、小説家としては失格だ。さあ困った。ここから先は誰か別の書き手にバトンタッチを願いたいものだが、とりあえず再び物語の現場に話を戻すしかないか。

× × ×

上野孝次がこちらに来て書いた、生前の続きの小説はまだ完成を見ていない。厖大な枚数の原稿用紙を積み重ねているだけだ。彼の小説の題材は明らかに現世が対象である。

こちらを対象にした小説ははっきり言って主題になり難いからだ。第一、こちらの生活は反復の繰り返しで単調で変化に乏しい。自ら置かれた環境が天国だと思っている人間同士の間に愛の葛藤も憎悪も不信も疑惑も存在しない。だから現世を主題にするしかない。こちらを舞台とした小説を書くならまず現世を否定的条件として設定するしかないが、しかしそんな小説はきっと退屈極まりない。そんな小説を一体誰が読むというのだろう。現世の人間からもこちらの人間からも無視されるに決まっている。つまりこのプルーランドは小説が成り立たないシチュエーションなのである。だが彼がこちらで小説を書く以上、やはりここの現実に立脚し、この領域にいる人間が対象にならなければばリアリティに欠ける。

〈だけど待てよ。人間が存在している以上、そこにはドラマが発生するはずだ。人間がたった一人しか登場しない『ロビンソン・クルーソー』だってちゃんと小説として成立したじゃないか〉

彼は老画家に創造の意味について質問してみた。

「この美しすぎる環境の中で絵を描くという意味は先生にとって何でしょうかね」

「ここの自然の中に立った時に、わしらはそこに美を見ているんやけど、そのきれいな色や形をした自然物はそれを目撃しよる別の人間の腹の中の表現やないかと思うんや」

「すると自然をわれわれ人間の精神の隠喩としてとらえるということですかね」
「そうなんや。この自然全体が人間精神の隠喩であると同時に直喩の表現なんや」
彼がここに来る時、銀嶺を前にして己という存在が宇宙の大霊ともいうべき存在と合一する感覚に襲われた。その時、彼の頭をかすめたのはまさにこの老画家が語るようにあらゆる自然の外観は人間の精神のある状態に対応しているという直覚で、彼もそれに感応したのだった。
「まあ言うてみたら、ここの風景はここに住んどる人間の無意識を具現化したようなもんやから、われわれの中の精神が創造したもんやと考えて、それをもう一回画家の手でキャンバスに戻さんとあかん作業なんや」
「ここでの創造というのはつまり循環なんですね」
「せや、人間精神のどんな奇怪なもんでも、悪魔的暴力的なもんまでが、ここでは美に還元されてしまいよるんや」
「するとここには現世に見る醜悪な概念はないということなんですかね」
「そのなあ、醜悪なもんを美に還元させよるのが仮に創造やとすると、ここではその考えは成り立たへんのや。できることちゅうたらこの美を破壊することだけや」
「創造を前提とする破壊がここでは行われないということですかね」

CamScannerでスキャン

「破壊のための破壊は芸術の否定になるんと違いまっか」

「破壊によって創造されるものは美ですが、美を破壊して何が残りますかね」

「破滅でっしゃろ」

「結局、芸術には何も期待できないということですかね」

「そんなことわかり切ったことちゃいまっか」

「信じないところからしか出発できませんね」

「芸術家よ、語るな、作るんやということに結局は落ち着きまっせ。ハッハッハッハ」

〈自分のことを棚に上げてこの老いぼれ爺さんは勝手なことをよく言うわい〉

「己の中の天才をどう引き出すかですね」

「小説家の先生、天才は悪でっせ。残念ながらこの場所には破滅は存在しまへんからな。

破壊や破滅を求めはるんやったら別の階層に行くか、現世に戻るしかおまへんやろ」

「私がいた地獄にね」

「そや、地獄やったら、ええ小説書けまっせ、ハッハッハッ」

「必ずしも妻が高次に移行したとは限らないでしょうね」

「地獄から這い上がってきはったあんさんを救うた奥さんはここよりもっとええとこに行きはったんちゃいまっか」

「じゃあここは、私達が勝手に思っているだけで、本当の天国じゃないのかしら？」
「ここより低い階層にいよるわしの嫁はんは、そこがあいつにとっては居心地がええさかいに天国やと言ってますわ」
「それはそれで幸せなんでしょ？」
「わしから見るとそうは思わんけどなあ」
「私、ここが気に入っていますので、ここは私にとっての天国なの」
「そういうことでなきゃ存在価値がないですよ」
「せやからここでやることがもうないようになったり、退屈したりして、もっと自分を磨きたいと思うんやったら別の処に行くことになるかもしれへん。わしはまだまだここの景色を描きたいと思っとるさかいに、もう一寸おってもええと思ってますわ。描ききった時はまた別の処へ呼ばれんのと違いまっか。わしがまだここにいたい間はここがわしを必要としとるんやと思っとるんやけどなあ」
「誰に呼ばれるんですの？」
「別に神さんが呼ぶわけやない。あんたの心がこの世界の摂理とピタッと合った時、ここから消えまっしゃろ」
「そう考えると私なんかはまだここに百年も二百年もいることになりそうですなあ」

「新しいもんが来て古いもんがどんどん消えよるのか。それとも永遠にここに留まっとるのか。つまり居心地が悪るうなるということは、その人間にとってここが地獄に思えてきよる時なんやろな」
「じゃあ先生、現世に帰りたいと思ったらどうなるんですか」
「その時は、あちらに転生する時やろ」
「私はもうあんな寸善尺魔の現世には二度と戻りたくないですなあ」
「じゃあこっちでうんと文学の修行でもしておくれやす」
「絵も小説も書けない私はどうすれば修行できるのかしら」
「女は存在そのものが芸術やから、男を楽しませてくれるだけでええのや。せやから男は女でちゃんと修行させてもらってますわ。男にそのチャンスを与えてくれとる女は功徳を充分積んでおるんやから、それでええんや、心配せんかてええ」
「小説なんてこの私だって書いているんだから、女性の感性は小説に向いていますよ」
「私、童話が好きなんです」
「じゃあ童話を書いてみればどうですか。ルイス・キャロルとかシャルル・ペローみたいなのを」
「私、童話の読者であって作者ではないですわ」

「じゃあなたの好きな私小説なら書けるでしょう。日記か、向こうにいらっしゃるご主人宛ての手紙でいいじゃないですか」
「私があちらから初めてこちらに来た日のことなら書けそうだわ。とっても変わった一日だったの。まるで童話の始まる入り口から知らない世界を覗いたようだったわ」
「それを書けばいいじゃないですか。あなたを三人称に置き換えれば、自分がだんだん客観化されて、現実が虚構化して、勝手に物語が自立していきますよ」

ふと足元に眼をやるとそこに一匹のかまきりがいて、両手をこすり合わせたり、頭を百八十度回転させたりしながら、三人の会話に耳を傾けている様子だ。それを三人が見つめていると、やがてかまきりの尻から黒くて細くて長い二匹の針金虫が押し出されてきた。二匹とも三十センチ以上もあった。気がつくとかまきりの姿はそこにはなかった。床の上では不気味な針金虫だけがお互いを貪るようにからみあったまま、いつまでも執拗に離れようとしなかった。

上野孝次のサゼスチョンを受けた彼女は、一週間も経たない内に生まれて初めてひとつの短篇小説を書き上げた。その作品は『アリスの穴』と名付けられた。

CamScannerでスキャン

聖フランチェスコ

CamScannerでスキャン

チャイを飲みながらふと思った。
〈旅に出よう〉
当てもなくそう思った。
こちらに来てからは想いと行動がひとつになっていることに気づいていた。以前の上野孝次には絶対考えられないことだった。第一、目的もなく衝動だけで旅に出るというようなことは別の人格でも彼の中に入り込まない限りあり得ないことだった。
そのあり得ないことが起こった。
旅支度などした憶えもないのに上野はいつの間にか、いかにも旅のスタイルをして玄関の前に立っていた。こちらに来た当初は必要なものがあれば街に出掛けて買うことが多かったが、最近は想ったことがそのまま現象となるまでに思念力がついていた。欲しいも

のは何となく手に入るようになった。だから今では以前のように必要なものをわざわざ街へ買いに行かなくても用がたせるようになった。

空には雲ひとつない。そういえばこの地で雲をみたことがない。いつも快晴で、冬季のモンスーン地帯のように空気が乾燥しており、雨が降るということもない。といって咽がカラカラになることも皮膚がカサカサになることもない。向こうとこちらの決定的な違いは、こちらには夜がないということだ。従って眠る必要もない。それでもどうしても寝たいと思えば、夜も作れるし、降るような星の下で小説の構想を練ることも可能だ。

こういう超自然的な現象は上野にとってはもはや珍しいことではなくなっていた。ここに来た当初は気でも狂ったのではないかと案ずることが多かったが、今では当たり前すぎて、むしろ現世の方が狂っていると思うようになった。

もうひとつ面白いことに気づいた。

それは常に「今」という瞬間しか実感していないことだ。「今ここに」という感覚だけが自分を支配しているのである。だから過去を思いわずらうことも、まだ何も起こっていない未来のことで不安になるということもない。五感が感受することだけが関心の対象になっているので上野は時々〈俺は動物に近づいて来たのではないか〉と思うこと

がある。動物は過去や未来について思考することもないからだ。
〈旅に出よう〉と思ってソファーに一日中寝ている猫のマックスの方を見ると、たった今までいたのにいつの間にかいなくなっていた。書斎のドアは閉まったままだというのに。
〈俺の意識を察知してどこかに早々と消えちまったに違いない〉
上野は玄関のドアにロックもしないままわが家を後にした。
〈俺はどこへ旅に出ようとしているのだろう?〉
そんなことは考える必要がなかった。旅への衝動が上野をしかるべき場所に導くに違いない。
〈では俺の自意識は?〉という懐疑も気にならなくなっていた。
旅の衝動と同時に上野は解放されたのか、身も軽快に実年齢より遥かに若々しい足取りで軍歌を口ずさみながら大通りに向かった。
〽さらばラバウルよ
また来るまでは
しばし別れの涙が滲む
恋しなつかし……

人や車の数は現世とさほど変わらなかった。ただ不思議なことに信号がない。にもかかわらず交差点では人と車がぶつかることもなく見事に秩序と調和がコントロールされている。このようなスクランブルの中を上野は車や他人に接触することもなくスタスタと歩いて行った。大通りの突き当たりに駅があった。駅名の表示がないのでどこの駅だかわからないが、誰もそのことには無関心なのか困惑しているような者は一人もいない。駅の構内には人が多かったが、どこを探しても切符売場が見つからない。自動式改札口は形だけで自由に通過することができた。改札口を入ったところのプラットホームにはすでに列車が停車していた。行き先も出発時刻の表示もない。上野は躊躇することなくこの列車に乗り込んだ。

列車は彼を待ち構えていたかのようにすぐに発車した。

上野の顔面に子供のような微笑が浮かんだ。彼はこんな自分の無計画な無謀さに別の自分を再発見してホクホクした。幾分得意な表情を浮かべながらリュックの中からウイスキーの小さいボトルを出した。一口飲んで、フーッと大きい息を吐き出して、窓の外を飛んでいく風景に眼を凝らした。

〈そういえばこちらに来て初めての旅だ〉

一体彼はどこに導かれるのだろう、なんて考えてもいなかった。彼の関心事はこの瞬

間で、五感に触れる全ての事象に体が敏感に反応するだけだった。このような感触は大人になってからは一度も経験したことがなかった。上野はまるで子供の頃に帰っていくような感覚に襲われてワクワクしていた。

列車は走る。どこまでも果てしなく鉄路を疾走する。

ここは時間のない世界だ。にもかかわらず彼はまるで時間旅行をしているような錯覚を抱いていた。どんどんどんどん時間を遡っていく感覚に彼は半ば酩酊した状態で身を委ねていた。このような心地よい時間感覚を体験するのは全く初めてだった。

ふと上野は思った。

〈ウイスキーの酔いがまわってきたのかもしれない〉

彼はアルコールが入るとすぐ眠る質だがいつものように睡魔に襲われているわけではない。ではこの酩酊状態は何に起因しているのだろう。時間の存在しない場所で時間を知覚するこの感覚をどう言葉で表現すればいいのか小説家・上野孝次もさすがにお手上げ状態である。

〈この列車はもしかしたらタイムマシンではないのか?〉

上野はいつか観た映画「タイムマシン」の中で時代の情景がどんどんフラッシュバックしながら変化していく映像を思い出して、もしや窓の外の風景もあのように物凄いス

ピードで巻き戻されているのではないだろうかと眼を窓の外に向けたが、風景は列車の走るスピードに合わせて後ろに流れているだけだった。そんな上野の意識の変化におかまいなく、列車は線路の上をひた走る。それにしてもこの列車は、上野を乗せて一体どこに向かおうとしているのだろうか。窓外の風景は密集した街を通り抜けて鉄橋の架かった広い河を渡ったかと思うと新緑の田園風景の中を飛び越えて、放たれた矢のように走り続けた。そしてどんどん迫ってくる真っ黒な大きい口を開いて待ち構えているトンネルの中に頭から突入していった。巨大な大砲の筒の中を弾丸が抜けていく感触に上野は興奮を覚えた。

トンネルは長かった。

上野はトンネルに突入したことさえ忘れてしまっているほど、すっかりトンネルと同化してしまっていた。もう何時間も何日もトンネルの中を走り続けているかのように無感覚になっていた。

〈この感覚は母親の胎内から産道を抜けて行く感覚だ〉

小説家らしからぬ言い古された比喩に我ながら気恥ずかしくなって頭をボリボリ掻いた。やがて列車の車輪と線路の軋む音に変化が現れたかと思うとトンネルの壁に、カーテンが開いたように光がサーッと差し込んできた。

列車はトンネルを貫通した。

車内に光が満ちた。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」というフレーズが頭を掠めた。〈俺はどうしてこんなに俗っぽいのだろう〉と自分を戒めた。さらに、〈所詮俺は大衆作家なんだ〉と卑下もするのだった。

トンネルを出た途端、眩しかったので彼は顔をくしゃくしゃに顰めた。田植えが終わった後なのか鏡のようにてかった水田には海の底のように青い空が投影されている。数羽の燕が水面すれすれに飛行している。前方の鎮守の黒い森の朱赤の鳥居がそのまま水田に反転して映っているのがスピードを落とし始めた列車の窓からくっきりと描き出されていた。

〈停車するようだ〉

上野は思わず立ち上がった。在来線の、ほとんど廃墟化したような小さい駅が佇んでいた。この駅で降りたのは上野一人で他に人の降りた気配はない。

駅の名もない。駅員はいるのかいないのか、駅舎の中には人影がない。彼が気づいた時にはすでに発車したのかもうそこには列車は跡形もなかった。

駅前のロータリーにはバスが一台停まっている。バスの周囲には二、三人の老人がウ

ロウロしている。駅を背にやや広い道路が真っ直ぐに伸びているが車の数も人の姿もまばらで閑散としている。見ると錆びたシャッターを下ろした店がやたらと眼につく。シャッターに書かれた文字も褪色が激しくまともに読めるものはほとんどない。この町を知る何か手がかりはと辺りを見回すのだが確証を得られるものは何もない。上野の旅の目的地がここだとすれば、この町は何の意味を持つのだろう。

〈それにしてもこの寂れた町に俺は一体何の用があって来たのだろう〉

上野は妙に背中がざわざわするのを感じた。

たまに人影はあるがほとんど年寄りばかりだ。どこかの店の中からテレビの音が聞こえるが家の中に人影はない。駅前通りが終わる所に広い川があってコンクリートの表面が剥がれた欄干のある橋が架かっていた。さらにしばらく歩くと、正面に木川時計店と書かれたシャッターの下りた店があるY字路にぶつかった。上野は勝手知ったかのように岐路を右に進んだ。その道はやや狭くなっており、道路はタイル貼りになっていたが、大半がめくれ上がっていた。以前は商店街だったのだろう。アーケードの残骸が残っているが、ここも軒並みシャッターが下り、傾いた街灯の柱だけが商店街の終わる端までジグザグに杭を打ったように並んで立っていた。もう何十年も手つかずのまま放置されているのか、この町は地盤沈下と空洞化が激しく、町としての機能は完全に失われてい

CamScannerでスキャン

るように思われた。百メートルばかりの商店街を抜ける間、猫が一匹道路をゆっくり横切っただけで上野は一人の人間にも会わなかった。

ただ上野はこのゴーストタウンのような町になぜか懐かしい感情が込み上げてくるのを抑えることができなかった。この感情が彼のどこから湧き上がってくるのかは彼自身にも定かではない。彼は今、遥か彼方の死んだような時間の中に佇んでいる気がしている。地理的にも時間的にも計り知れないほど遠い地点にやってきたように感ぜずにはおられなかった。

商店街を抜けるとそこには民家がかたまっていたが活気が失われ、どの家もまるで無人のように沈黙していた。中にはモダン建築もあるが、今にも壁が剥落しそうな家ばかりだ。

上野が列車の中で感じたような時間の逆行現象は今はない。むしろ行き着くところまで来てしまったような気がしている。こんな滅びたような無常観の漂う町から一刻も早く脱出したいところだが、上野はどういうわけかこの町に無性に惹かれるのだった。何かこの過疎化した町を舞台に彼は小説の構想でも描こうとしているのだろうか。彼は民家のはずれにある空き地の切り株に腰をおろして、リュックの中から取り出したウイスキーを胃の中に流し込んで、額の汗を服の袖で拭いながらフーッと大きく息を吐いた。

そして燕が舞う青空を眩しそうな表情で仰いだ。疲れているのかすぐに酔いがまわってきた。上野はトロトロと微睡み始めた。遠くでのどかに牛の鳴く声がしているのを半酔半醒状態の中で聞いていた。

牛は立て続けに欠伸をするように、実に怠惰に語尾を伸ばして鳴いた。上野は自分の小さい鼾を耳にして思わず崩れかかった身体の背筋を垂直に正した。上野のダンディズムはこうした瞬間にも対応するのだった。彼は人前では決してだらしない姿は見せない主義を貫き通していた。

眠っている鼻先にむず痒い感触を感じてくしゃみをしたが、彼は姿勢を正したまま薄目をあけた。いつの間に現れたのか眼の前には猫じゃらしの草を持ったオカッパの少女が立って笑みを浮かべていた。二人はしばらく睨めっこしていた。相手の微妙な変化を見逃すまいとしながら、この小さい女の子は大人の上野の心理的動揺を誘うようなこっけいな表情をして見せた。彼も負けじと変な顔をして先に相手を笑わせてやろうとしたが結局先に笑ったのは彼の方だった。

「おじちゃん、お酒臭い」

いくら小さい子供だとはいえ、彼はこの少女の第一声に翻弄され「まいった、まいった」と言って自分のおでこを叩いて見せた。

駅からここまで老人しか見なかった彼は、眼の前に少女がいるのが非現実的に思えた。
「お嬢ちゃんはこの近くに棲んでいるの」と上野は尋ねた。
「ウン、そうよ」
「どこのお家?」
「ここよ」と言って上野が座っている背後の空き地を指した。後ろを振り向いた上野には、雑草の生えただだっ広い空き地に能舞台に描かれた、見得を切ったような一本の老松しか眼に入らなかった。
「ここ?」
「そうよ」
〈この子は俺をからかっているな〉
「ああ、そうだったの、広い立派なお家だね」
「そうよ」
〈もしかしたら少し変な子供かもしれないぞ。でもそれにしては身なりはちゃんとしているが……〉
「おじちゃんは遠くから来たんでしょ?」
「そう、うんとうんと遠くからだよ」

「あたし、おじちゃんのことよーく知っているわよ」
「おじちゃんが小説家だってことをかい？」
「それだけじゃないわ」
「じゃあ、何を知っているの？」
「おじちゃんがここに来たことよ」
「ここに来たこと？　おいおいお嬢ちゃん、おじちゃんは自分でもどうしてここに来たのかが分かんないんだよ」
「おじちゃんは分からなくてもあたしはちゃんと分かっているの」
〈やっぱりこの子はどう考えてもおかしい。狂女ではないのか〉
「あたしは狂ってなんかいないわ」
上野は自分の心を彼女に覗かれたことにギクッとした。
「おじちゃんをここに呼んだのはこのあたしよ」
彼は首筋の辺りに鳥肌が立つのを覚えた。
「だからおじちゃんはここに来たのよ」
「するとおじちゃんはここに何をしに来たのだい？」
「あたしに会うためよ」

CamScannerでスキャン

彼は完全に彼女の術に嵌り込んでいる。

「おじちゃん、あたしのこともこの町のことも忘れてしまったの？」

〈俺はまだ酔っているのかなあ〉

「思い出せないの？」

やや強い口調で少女は迫るように言った。

上野は辺りをキョロキョロと見渡しながら何か心当たりがあるものを探し求めているようだが、何ひとつ見覚えのあるものはない。

「あたしのことも？」

彼は彼女の顔をまじまじと見つめたが記憶の底から浮上してくる印象を汲み取ることはできなかった。

「おじちゃんは昔どこにいたの」

「おじちゃんがまだ十代の頃、学徒兵で鹿児島の知覧飛行場にいて、特攻攻撃の日を待っていたんだけれど、すぐ戦争が終わって帰って来たんだよ」

「ううん、そんなこと聞いてんじゃなくって……もっと前のこと」

「もっと前って子供の頃かい？」

「そう、子供の頃」

CamScannerでスキャン

「子供の頃は洪水がよく起きる田舎の小さい町にいたことがあるけれど、小さい頃、町を引き上げて東京に行ってしまったので、それ以来一度も生まれた場所に行ったことがないから全く何も覚えていないね。ところでお嬢ちゃん、いくつ？」
「四つ」
「おじちゃんも六歳の時まではその町にいたんだ」
「知っているよ」
「何を？」
「おじちゃんがいたこと、おじちゃんと遊んだことも」
〈いよいよこの子はおかしい〉
「おじちゃんの田舎は長野県だよ」
「そう長野県だよ」
「だってお嬢ちゃんはこの町の子だろ？」
「そうよ、ここは長野県よ」
「長野県のどこ？」
「おじちゃんがここに来る時、洪水がよく起きる川を渡ってきたでしょう。その川のある町よ」

しまった。
上野は少女に謎を掛けられているようで、思わず頭をかかえたまま眼を閉じて黙って
遠くでさっきの牛が再び眠そうに鳴いた。
その声で上野も眠そうに目を開いた。
眼の前にいたはずの少女はすでにそこにはいなかった。
彼はしばらく放心状態で何も考える気がしなかった。もうこの町は彼にとっては出涸らしのように思えた。気がついたら来た道を戻っていた。自分の取った行動に彼は認知症の症状を当てはめたりしながら何とか本来の自分を取り戻そうと努力するのだった。
そしていつの間にか上野は家の玄関の前に立っていた。

上野はリュックを背にしたまま書斎のソファーにドッカと重い体を投げ出した。どこからともなくマックスが甘え声で擦り寄ってきて、彼の膝の上に飛び乗った。マックスの背中の柔毛が上野の手のひらに吸いついて心地よい感触を与えた。彼はマックスを抱き上げて鼻をこすりつけた。マックスは眼を細めて咽をゴロゴロ鳴らした。
〈よくわからん旅だった！　それにしてもあの町はどこ？　あの少女は誰？〉
現実なのか酔っ払って見た幻なのか、それとも夢なのか、そのどれでもあり、どれで

もないような気がした。

彼は長い間、旅の感情から抜け出せないまま外にも行かずに家の中に閉じこもっていた。家の中は相変わらずがらんとしていた。妻の記憶を呼び起こす物は何ひとつなかった。彼は妻が気に入っていた和室の畳の上で猫のように背を丸めて横になった。家の周りには金木犀が何本も植わっていた。花が、地面を黄金色に染めたかと思うと再び花をつける。金木犀の香りが部屋の中に充満していた。上野はやっと平常の生活を取り戻した。だけど彼がこうして家の中にいると不在の妻のことが頭から離れない。

〈妻に対する執着がある以上、彼女は戻ってこないような気がする〉

森の入り口に棲んでいるあの老画家のように何の未練もなく妻から自由にならなければならないと思えば思うほど、彼は妻の幻影の深みに沈んでいくのである。

「小説家の先生、芸術家はいつまでもひとつのことに囚われているとええ仕事ができまへんで」という声が耳元で聞こえるようだ。

生前の上野は妻の存在をそれほど気にかけていなかった。妻がわずらわしい存在であれば別だろうが、彼女は一切彼の仕事に口出しをするような女ではなかった。彼がいくら夜遅く酔って帰ってきても、ちゃんと正座をして待っているような女だった。いちいち「誰とどこで飲んでいたの」なんて野暮なことは聞かなかった。彼は講演や取材旅行

で出掛けることがあってもいちいち行き先を告げたり、いつ帰るとも言わないで家を出た。彼の行動は夫婦の間で暗黙の了解だったので、彼が妻の束縛を受けるというようなことは全くなかった。それだけに彼がこちらに来て間もなく妻が彼の前から忽然と姿を消したからといって、なぜこれほどまでに気がかりになるのか分からなかった。

彼は息を引き取るまでの長い間、入院しており、すでにガンを宣告されていたので、充分時間をかけて十全に心の整理が出来ていたはずだ。もちろん妻との別離に対しても何の心残りもなく未練がましい言葉ひとつ残さず、見事といってもいいほど覚悟の死であった。それがこちらで再会し、そしてもう一度別れる羽目になったからといって、どうしてこんなに心を動揺させなければいけないのか理解できなかった。自分はいつだって行き先も言わないで黙ってフッと消えるくせに、妻が消えたことには異常なほど執着しているように思えるのである。

「人間は死んだら無になるんだよ」

上野は病院で見舞いにきた妻によく語ったものだ。

「あらそうかしら」

「そうに決まっているじゃないか」

「私はそうは思わないわ。死の先に待っている何かがあるから人間は生を大切にしたが

るのじゃないかしら」
「俺には無しか見えない」
「そんなに思い出したくないことが沢山おありなんですか」
「生をわざわざ向こうまで引きずって往くんなら、何も死ななくってもいいじゃないか」
「一日生が終わることで人間は自分の一生を反省するんじゃないかしら」
「俺はそのいちいち反省するってことがまるで牧師みたいで我慢ならないんだよ」
「じゃあ生きて、ハイこれでお終いってことなのね」
「人間ってやつは苦しむために生まれてきたようなもんだよ、実に愚かな存在さ」
「私は哲学者じゃないので難しいことはわかりませんわ」
「とにかく人間は死んだらお終いだよ。一巻の終わりだ。それでいいんだよ。死んでまで生きていた頃の事を反省したり、執着したりしていたらどうするのかねえ」
「だから私は生きている間に心に気がかりになっていることをきれいさっぱり整理しておきたいのよ」
「人間はそう簡単に悟れるもんじゃないよ」
「ですから一度に悟れないので人間って何度もこの世に生まれてきてひとつずつ未完の

CamScannerでスキャン

部分を解決するんじゃないのかしら。そのために輪廻があるんじゃないでしょうか」
「そこが宗教の欺瞞であり、幻想ってやつだよ。死んで脳味噌が灰になったら全てその人間の世界は死という型を取って完成するんだよ」
「ハイ、ハイ、よーく解りました」
妻とかわした会話を上野は思い出しながら自分の考えが間違っていたことをこちらに来て嫌というほど思い知らされ、また打ちのめされた。そのために彼は妻に頭が上がらなくなっていた。でも妻は一度も彼の生前の考え方を批判したり、責めたりしなかった。それだけに彼は妻の不在に必要以上の寂寞感を抱いているのだった。
あまりの物寂しさから上野は老画家を家に呼んだり、また訪ねたりしながら気を紛らわせていた。でも彼が郷里への旅から帰ってからはまだ一度も老画家の家に遊びに行っていなかった。
〈久しぶりに老画家の家を訪ねてみよう〉
彼の家まではかなりあるが、散歩がてらに行くには丁度よい距離だ。彼が向こうで住んでいた杉並に似た街を抜けると彼の馴染みのない全く別の街に変わるのだった。丘の上から望む谷間の風景はいつ見ても心が和んだ。だがそこに行くまでにはいくつものカ

テゴリーの異なった街のブロックを通過することになる。カテゴリーごとに建物群が分離して存在しているのではなく、通り一本挟んだ向こう側とこちらの側の建物の様式はがらっと変わっていたりして、ある一画はまるでヨーロッパのようだ。かと思うと別のブロックでは古い時代の民族が住んでいたり、とにかく様々な国の歴史と異なった様式の建物、各国、各時代の人達が何の違和感もなくこの街の中にゴチャゴチャに棲んで生活を営んでいた。街はずれには学校や図書館、博物館などの公的施設があるが、行政機関はどこを探してもない。さらに街の一番はずれに行くと、工場が建ち並んでいてひとつのブロックを通り過ぎる度に匂いが変化するのだった。葉巻の匂いに混じってチョコレートやチーズの匂いがしたり、あるいは南方の花や果物の香りがしたりと様々である。

初めて街の中に入って行った上野はこの街の構造や仕組みが面白くてしばらくは見物に夢中になっていた。こちらでは一日が終わったという感覚がないので疲れるということもない。また病人が一人もいないので医療関係の施設はひとつもない。

街を通り過ぎて、丘の上に立った上野はいつもするように大きい深呼吸をして、自然の香りを胸いっぱいに吸い上げたあと、小川に通じるなだらかな坂を下った。初めてここに来た時見た巨大な雪山はもうなかった。無意識のうちに現していた想念の風景だったのである。水車のある川を渡る時、上野は決まったように流れの中で戯れている小魚

を見るのが楽しみだった。この日も川底の水藻が長い尾をくねくねとよじらせながら群をなして先頭を競う小魚にまといついていた。橋を渡った彼には初めて来た時のような新しい土地に対する緊張感はもうなかった。

老画家の家には何度も行ったので勝手知った道だ。この界隈で老画家は時々イーゼルを立てて絵を描いていることがあるが今は彼の姿がない。きっと家にいるに違いない。上野は丸太で組んだ重い扉についている鉄製の輪をコンコンと二度叩いた。しばらく扉の前で待っていたが中から返答がなかったので、庭に回って窓から中を覗いて見たが、老画家の姿はなかった。テーブルの上には飲み残しのコーヒーカップがひとつ置かれていた。コーヒーを飲んだ後、外出したのかもしれない。

諦めた上野はもと来た道に出たが、川の方に戻らずにそのまま真っ直ぐに進んだ。彼の足はいつしか老画家の家で会った原節子に似た美人の家の方に向かっていた。

「先生に言われた通り私、小説を書きましたわ。読んでいただけますか？」

「ほう、『アリスの穴』ってタイトルか。いかにも童話好きのあなたらしいタイトルですな。蔦朝美というのはペンネームですか、それとも本名？」

「蔦は偽名ですが朝美は本名です」

「朝美さんか、いい名前だ」
「わしは先生に悪いけれど先に読ませてもらいましたわ」
側から老画家が口をはさんだ。
「画家の眼から見て如何でしたか?」
「まあ変わった視点から書いてはる小説ですな」
上野は一読した。
「うん、面白い。私がこちらに来た時の体験と全く違うのにまず驚いた。それとあなたという女性がこの小説によく描かれている。こういう題材はこちらに来た者でないと書けない話だ。現世の人間に読ませたいねえ。もし私が現世でこの小説を読んだらきっと一種のファンタジーとしてとらえるだろうなあ。決して死後の世界の現実とはとらえないだろう。死んだ人間にしか理解できないリアリティがある。この小説を読んだ現世の人間は死に対する恐怖がなくなるんじゃないだろうかね」
「私にとっては小説というよりノンフィクションですわ」
「だけど誰もノンフィクションと思わないですよ。だって死んだ人間が書いた小説なんて歴史上類例がないからね」
「だけどやなあ、こっちに来た人間で、まあ先生は別でっしゃろけど、この小説を読ん

て面白いと思う者は一人もおりまへんで」
「そりゃそうでしょうねえ。もし母親のお腹から生まれた子供が、文章を書けると仮定してですよ。誕生の瞬間など書いて現世の人間が興味をもつと思いますか。産湯のたらいの端に陽の光が当たっていたと書いたとしても誰が信用しますか？　それと同じように死後に目覚めた話なんてこれからでは馬鹿にされるだけですよ」
「だから朝美はん、このあなたの小説はこれらで発表しても受けしまへん。現世で初めて価値ある小説ですわ」

上野孝次は以前老画家に連れられて朝美の家に行ったことがある。彼女の家を訪ねたいと思った。老画家の家からはかなり離れているが、彼は散歩をするのが好きなので次々と移り変わっていく風景を楽しみながら歩いた。彼女の家は通りに面していた。実に可愛いレンガの煙突があって薔薇の花に囲まれた庭つきの、童話に出てくるような家だった。玄関の呼び鈴を押すと中から返事がして、ドアが内に開いた。同時に大きい犬が飛び出して、上野にまといついた。彼は猫は好きだが、こんなに大きなゴールデン・レトリバーはどう扱っていいのか、とまどうばかりだった。
「あら、先生。驚いたわ。私こんな格好をして、失礼いたしました」てっきり母が訪ね

て来たと思ったものですから」

朝美は薄いピンクのネグリジェの上に能装束の水衣（みずごろも）を羽織ったまま上野を部屋の中に招いた。

「ごめんなさいね。長い間眠っていなかったので部屋のカーテンを閉めて暗くしていたの」

「私にお構いなく。なんだったら出直してもいいんですが」

「いいんです。どうぞ中にお入りになって下さい」

「いきなりお邪魔して申し訳ないですなあ」

「現世の慣習で部屋の中は暗くしないと寝付けないものですから」

「私もそうなんですよ」

彼女は今まで寝ていたのか部屋の隅のベッドのシーツが乱れている。

「キャンドルをつけましょう。たまにはロマンチックな雰囲気もいいでしょ、先生」

キャンドルの灯は朝美の彫りの深い陰影のある顔を恐ろしいほど妖美に浮かび上がらせていた。朝美が部屋の中を歩く度にネグリジェが彼女の肉感的な体の線に添って波打った。

「先生、ワインは如何ですか？」

CamScannerでスキャン

「ああ」
彼女は三つのワイングラスにワインを注ぎ、「乾杯しましょう」と言ってウインクをした。
どこからともなく魅惑のスローな音楽が流れて来た。
「先日、その節はどうも」
「あれ、きのうでしたか」
「お礼はいいですわよ」
「なあに、もう四十九日のことだから忘れてしまいましたよ」ところで剛実さん、ここに三人
気心の人たちに来られたんだから寂しいんじゃないですか」
「わたしはツノなのか」
「……」
「主人はとっくに亡くしましたわ」
「面白そうか」
「そうよ、私がたいくつ数年前にね」
剛実は空になった二杯のグラスにワインを注いだ後、自分のグラスにも注いだ。
「じゃあ三人とも独身ってことなんだ」

「だって先生にはまだ奥様がいらっしゃるじゃないですか」
「いやー、彼女も死んだんですよ」
「そうね、私達みんな死んだ人なのね」
「全くおかしな話だ」
「死んだ人間がこうしてワインを飲んでいるんですものね」
「美女と野獣の幽霊がね」
朝美はフッと吹き出して笑った。
「灰になった人間が死んで再生されるなんてキリスト様じゃあるまいし」
「でも私、生きている時よりこちらの方が何倍も何十倍も嬉しいわ。現世のしがらみに縛られていた自分が可哀想に思えてきちゃうわ」
「私はまだ縛られていますがね」
「何に？　奥様に？」
「小説にですよ。女房のことは忘れたと言っているでしょう」
「読者不在の小説にですか」
「読者は眼中にない。私は小説を支配しなきゃいけないのに小説に支配されとりますからねぇ」

「じゃあ先生、小説家を捨てましょうよ、そして小説から解放されて自由になりましょう」
「あなたは私の前を箒を持って掃きながら歩いている人だなあ」
「私には失う持ち物がないので自由だわ。その点、先生は才能があるのでそれに縛られていらっしゃる」
「こちらでは才能さえ束縛の対象になるのか」
「いっそのこと手離しちゃいましょうよ」
と言って朝美は上野のワインを彼の手から奪ったかと思うと、一気に自分の口に流し込んだ。そして再び彼のグラスになみなみとワインを注いだ。上野もそれを一気にあけた。急に酔いがまわってきた。と同時に睡魔に襲われた。朦朧とした意識の中で朝美のネグリジェの胸元が揺れるのを見た。立ち上がった朝美が上野の後ろにまわって胸を押しつけるのを、まるで夢の入り口で感じているように思えた。
遠くで上野を呼ぶ声がした。それに応えたかどうか不確かだったが、朝美が薄暗い部屋の隅のベッドの中から上野を呼んでいるように感じた。彼は意識がもやもやとして実体がつかめない状態の中で、
〈逃避、逃避、とうひ、とうひ、トーヒ、トーヒ……〉
と呪文のように頭の中で言葉を繰り返した。揺れながら、彼は椅子から立ち上がった。

「お入りになって」

という朝美の声を聞いた。

彼女は白いシーツをめくって上野に入るように誘った。かろうじて届いているキャンドルのうすら明かりの中で彼女の薄いネグリジェを透かして乳房がのぞいた。CHANELの香りが彼を迎えた。彼は身を縮めて、持ち上げられたシーツの中ににじり寄るようにして入った。上野は朝美の二つの乳房の間に顔を押しつけて、片方の手でネグリジェの胸元を押し開きながら小さくふるえる手を差し入れてひんやりした乳房を手のひらの中に感じた。そして乳首を弄んだ。朝美は自らネグリジェをたぐり寄せるようにして頭から裏返しに脱いだ。いつの間にか二人は真っ裸になって重なっていた。上野は朝美の乳房に顔を沈めながら乳首を口の中にふくんだ。

彼はこの行為が現実のものなのか、夢の中の出来事なのか、その区別がついていなかった。まるで誰かの小説の中の一場面をなぞっているようにも思えた。上野の陶酔は完璧であった。もはや彼の精力は実年齢をはるかに凌駕していた。彼は完全に朝美の肉体の中に逃避していた。またそれが完遂できた。朝美とひとつになることで彼は何もかも手放すことが可能になった。めくるめく眩暈の中で彼が後生大事にしていた様々な執着が彼女の中で液体になって溶けていくのを快楽の絶頂で感じ取っていた。激しい熱情の

CamScannerでスキャン

あとに長い肉体の沈黙が続いた。彼は自らの意識の底に静かに沈んでいった。そして果てしない眠りが彼を誘った。

ふと肌を撫ぜる冷気を感じて、彼は瞼を開いた。彼は素っ裸のまま芝生に寝そべっていた。うすぼんやりした頭の中に断片的に官能の記憶が押し寄せては消え、消えては押し寄せている。そのことが彼の今の状態とどう結びついているのか急には判断ができない。酔いから、あるいは夢から覚めたというより催眠術が解けたような、半ば意識が混濁したような感覚だ。彼は芝生の上に半身を起こしてしばらくボーッと遠くを眺めていた。

〈ここはどこだろう?〉

朝美のメルヘンチックな家も薔薇の庭も彼女も完全に消滅していた。その跡にはきれいに手入れされた芝生が広がっていた。芝生の上に上野の着ていた衣服だけが散らかって捨てられたように残っていた。彼は裸のままふらふらと立ち上がった。そして亡霊のように歩き出した。足は自然に老画家の家に向かっていた。素っ裸にもかかわらず、ダンディスト上野孝次から羞恥心は消えてなくなっていた。しばらく行くと、老画家がいつも写生している公園のベンチが眼に入った。そこから老画家の丸太小屋のアトリエが

見えるはずだが、それがない。
〈老画家の家も消えてない⁉〉
辺りを見渡しても老画家の姿はない。そう言えば来る時すでに彼はいなかった。途中ですれ違った人がいたが、彼の裸には無関心だった。
〈朝美さんも老画家も消えた！　俺だけが皆んなからひとり取り残されてしまったのか⁉〉
はっきりしない霞んだ頭に、耐え難い孤独が激しく襲いかかってきたが、それは一瞬のことだった。

金木犀の香りが充満する妻の部屋に素っ裸のまま立って、縁側越しに青空に溶け込んだ金色の金木犀を眺めていた。何だか体の中が空っぽになった感じだった。彼の中に巣食っていた執着も未練も何もかもあのペタッと塗られた青一色の空の中に塗り込められているように思えた。生まれて初めて体験するすがすがしい気持ちである。
ふと六歳までいた故郷の風景が蘇ってきた。ほとんど記憶から消えてしまっていた七十数年前の風景が万華鏡の中でぐるぐる回転しながらキラキラ光っているように見えた。
「おじちゃん」

という声がした。空耳だろうか。でも確かにした。
「おじちゃん」
再び聞こえた。
〈あの少女の声だ〉
彼は思わず振り向いた。陰翳の中にボーッと浮かんだように座っていたのは彼の妻だった。
彼の驚きようは尋常ではなかった。立っていた体がストーンと膝から畳の上に崩れた。まるで亡霊を見たように総毛立った。思わず大声を上げそうになったが金縛り状態になっていたので咽の声はつぶされて音にならなかった。
「何をそんなに驚いていらっしゃるの」
「何だお前か！　ああ、びっくりした!!」
彼は妻を眼の前にして恐怖した。だが次の瞬間、夢ではないかと思うほど欣喜雀躍したが、気取り屋の彼はそんな素振りも見せなかった。
「悪かったでしょうか？」
「いや、そういう意味じゃないけど、まさかと思ってね。もう帰ってこないかと思っていたよ」

「もう二度とこの家には帰ることはありませんわ」
妻の言葉で彼の胸に一瞬、異物ができた。
「じゃあまた消えるのかい？」
「そう、また消えますすわ」
妻は意味ありげに小さい声をあげて笑った。上野は思わず悪寒を感じた。久しぶりに会う妻は以前にも増して数段若返って昔の美しさを取り戻している。このことがかえって妻と彼との距離を隔てるのだった。
「俺は相変わらずだ」
「よーく、知っていますわ。あなたのお考えや行動は全部見ていましたから」
彼は朝美との事が一瞬頭をよぎった。その想念をキャッチしたのか妻は意味ありげな表情を浮かべてコトコトと笑った。
「久しぶりにお訪ねになられた古里はいかがでした」
「古里？」
「そう、あなたの田舎よ」
「わしは田舎なんかに行かんよ」
「あら、そうかしら。『ラバウル小唄』で恋しなつかしなんて、お歌いになったのもお

忘れ？　あなたって何もかもすっかりお忘れになっていらっしゃるんだもの」
「何を？」
「私のことですよッ」
「……？」
上野の妻は上野と幼馴染みだった。彼が六歳まで郷里にいて、その後家族が東京に移ると同時に二人は別々になってしまった。しかし後年、彼が東京の大学を卒業する間際、彼女と地下鉄で隣り合わせになった。最初はお互い気がつかなかったが、彼の手にしたノートブックの表紙に彼女は「上野孝次」という名前を見つけた。幼馴染みが十六、七年ぶりで偶然遭遇したことをお互いに約束された出会いと考えた二人は急速に仲を深めていった。二人が結婚した時、すでに彼は売り出し中の新進小説家であった。
「まさか、あの古ぼけた町が……？　あの少女はまさか？」
「ちょっといたずらが過ぎたかしら」
「おいおい、これって一体どういうことなんだい？　わざわざ俺を田舎に連れ出すなんてお前の考えていることはわからんよ。それにしても何の真似だね」
「いつも私があなたの側にいることを知らせたかったことと、私の存在もわかっていただくためだったのです」

妻は茶目っぽく微笑を浮かべた。
「お前はいつの間にあんなことができるようになったんだい」
「私のいる階層の人達はいつの時代にも帰ることができますわ。また望み通りの年齢になるのもそんなに難しいことではないんですよ」
彼はこちらの世界が親和の法則によって様々な階層から構成されており、それぞれの階層にはそれぞれの特徴があることを妻を通して理解した。
「もっとあなたが驚くことを言いましょうか」
「おい、おい、まだあるのかい、もうこれ以上驚かさないでくれよ」
「あなたが朝美さんのお家に行ったこと」
妻のこの言葉に上野は頭からバサッと冷水を浴びせられた。驚きを通り越して恐怖を覚えた。しかしあの一件は現実感に乏しく、むしろ幻夢的な妄想の世界での出来事であると自らに言い聞かせようとあせった。
〈あれはきっと潜在意識の産物で事実ではない。起こらなかった出来事なんだ〉
そう思い込むことで、彼は妻から必死で逃げ出そうとしていた。
「夢でも幻でも現(うつつ)でもあなたがなんと思われようとご自由ですが、あのことはまごうかたなき事実ですわ。あの朝美さんは朝美さんであると同時に私でもあったのです。私が

朝美さんの中に入ってあなたを迎え入れたのです。あなたは、あなた自身の囚人になっておられたので、何としてもあなたを現実から逃避させる必要があったのです。私が朝美さんのお身体をお借りしてあなたの拘りを一気に解消するためにはあの方法しかなかったのです。あなたを取り巻き、あなたの自由を束縛しているわずらわしい観念は、あのことでほぼ終了したのですよ。解放されたあなたは心身ともに自然の中に戻られたのです。だからダンディなあなたが何の抵抗もなく、あのように裸のまま平気で町を抜けて家までお帰りになったのですわ」

〈そういえばアッシジの聖フランチェスコも悟りを得たあと、着ていた衣服を脱ぎ捨てて素っ裸になって両手を広げながら背中に羽が生えたように草原を駆けて行ったっけ〉

「そうです。聖フランチェスコはあなたなんですよ」

彼は妻の言葉を嚙み締めるように聞いていたが、急に彼の両眼から涙が迸るように噴き出した。内部の圧力に押されるようにとめどなく涙が溢れて頰を伝って裸の下半身を濡らした。

遠い遠い時間の彼方から牛の鳴く声が聞こえてきた。

「さあ、おじちゃん、あたしと一緒に往きましょう」

妻が少女の声で言って、夫の手を強く握り締めた。

二人が消えたあとには家もなくなっていた。

CamScannerでスキャン

初出一覧

ぶるうらんど　「文學界」二〇〇七年九月号
アリスの穴　「文學界」二〇〇八年一月号
CHANELの女　「文學界」二〇〇八年二月号
聖フランチェスコ　「文學界」二〇〇八年三月号

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン